

隱岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 第3冊

みさきだに
御崎谷Ⅱ遺跡

—海軍望樓の官舎跡の調査—

2002年3月

島根県教育委員会

隱岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 第3冊

みさきだに
御崎谷Ⅱ遺跡

—海軍望楼の官舎跡の調査—

2002年3月

島根県教育委員会

序

本報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて、平成12年度に実施した隠岐郡西郷町大字岬町の隠岐空港整備事業予定地内に所在する御崎谷Ⅱ遺跡の発掘調査成果を記録したものです。

この調査では、明治時代の海軍望楼に伴う官舎の跡を検出し、この施設で使用された陶磁器や無線用電池、ガラス製品、金属器などを発見しました。この遺構・遺物によって、戦争に関わる軍事施設の様相の一部を知ることができました。これらは、日本海に周囲を囲まれた地理的環境から、隠岐島が軍事上の要地として捉えられていたことが分かる貴重な資料といえます。

本書が、隠岐島における近代史及びこの地域の歴史に触れる契機となり、私たちの周りに残されている文化財への理解に少なからず寄与すれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査と調査報告書作成にあたって、御協力いただきました地元の皆様をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

島根県教育委員会

教育長 山崎 悠雄

例　言

1. 本書は、島根県教育委員会が島根県土木部港湾空港課から委託を受けて、平成12年度に実施した隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査を行った遺跡は、次のとおりである。

御崎谷Ⅱ遺跡（隠岐郡西郷町大字岬町字御崎谷）

3. 調査組織は次のとおりである。

〔平成12年度〕

事務局 宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター所長） 内田 融（総務課長）

松本岩雄（調査課長） 今岡 宏（主幹）

調査員 広江耕史（調査第6係長） 伊藤徳広（同主事） 田中芳文（同調査補助員）

九谷万里美子（同調査補助員） 守山博義（同調査補助員）

〔平成13年度〕

事務局 宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター所長） 内田 融（総務課長）

松本岩雄（調査第1課長） 今岡 宏（主幹）

調査員 柳浦俊一（調査第2係長） 伊藤徳広（同主事） 勝部幸治（同調査補助員）

4. 本書の執筆・編集は、伊藤が他の調査員の協力を得て行った。

5. 採図中の方位は、測量法による第Ⅲ座標系のX軸方向を示し、レベル高は海拔高を示す。

6. 本書に掲載した造構実測図は調査員が作成した。

7. 造物の実測は調査員を中心として以下のものが行った。

大畠真由美 金森千恵子 高島留美 鉄尾愛子 野中洋子

8. 遺跡の調査後の空中撮影及び図化については、（株）ジェクトに委託した。

9. 造物の写真はセンター職員及び整理作業員の協力を得て伊藤が撮影した。

10. 図版3・4の空撮写真的著作権者は国土地理院である。

11. 造物の整理作業については、以下のものが行った。

村上広美 西上美穂子 川津 史 渡部哲子 大畠 金森 高島 鉄尾 野中

12. 本報告作成作業に関わる実測図の添付、版下の作成は、大畠 金森 高島 鉄尾 野中が行つた。
13. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。
14. 調査にあたり協力・教示いただいた方は次のとおりである。
- 横田登、野津研吾（隠岐島後教育委員会）
佐々木菊雄（岬町区長、西郷町議會議長〔当時〕）
山下峰司（瀬戸市歴史民俗資料館）
15. 現地調査の発掘作業に従事したものは次のとおりである。
- 門脇武男、但馬 保、松本由和、井川京子、鶴居 優、宇野マツ子、金岡道子
古山長太郎、古林和子、高梨美穂子、横地為憲、滝下好一、根本八重子、岩田良夫
上代佐重子、杉谷昭子、角 浩子、日野義勝、藤野庄一、齊藤正敏、高平鈴江
池田長之進、佐々木安江、服部 勤、佐々木菊雄、佐々木貞子、白川仁美、荒木忠義

本文目次

序

第1章 調査に至る経緯 1

第2章 調査の方法と調査経過 3

　第1節 調査経過

　第2節 調査の方法

第3章 遺跡の環境と歴史的背景 4

　第1節 遺跡の位置と立地

　第2節 周辺の遺跡と歴史的背景

第4章 御崎谷II遺跡の構造と遺物 7

　第1節 調査前の状況と概要

　第2節 碇石建物跡

　第3節 溝・石橋

　第4節 土坑

　第5節 井戸跡

　第6節 出土遺物

　第7節 小結

第5章 まとめ 34

　第1節 御崎谷II遺跡出土遺物の時期

　第2節 御崎谷II遺跡の性格と御崎谷遺跡との関係

挿図目次

- 第1図 御崎谷II遺跡の位置
第2図 御崎谷II遺跡周辺地形図 (S=1/3000)
第3図 御崎谷II遺跡と周辺の遺跡 (S=1/50000)
第4図 調査終了後平面図 (S=1/125)
第5図 建物1実測図 (S=1/60)
第6図 建物2実測図 (S=1/60)
第7図 建物3実測図 (S=1/60)
第8図 潟・石橋・土坑実測図 (S=1/80)
第9図 井戸跡実測図 (S=1/60)
第10図 陶磁器実測図 (1) (S=1/3)
第11図 陶磁器実測図 (2) (S=1/3)
第12図 陶磁器実測図 (3) (S=1/3)
第13図 陶磁器実測図 (4) (S=1/3)
第14図 陶磁器実測図 (5) (S=1/3・1/6)
第15図 陶磁器比率グラフ
第16図 瓦比率グラフ
第17図 瓦実測図 (1) (S=1/5)
第18図 瓦実測図 (2) (S=1/5)
第19図 瓦実測図 (3) (S=1/5)
第20図 ガラス製品実測図 (1) (S=1/3)
第21図 ガラス製品実測図 (2) ・ダニエル電池実測図 (S=1/3)
第22図 石製品実測図 (S=1/4・1/3)
第23図 金属器実測図 (S=1/2)
第24図 御崎谷遺跡出土古錢 (S=1/3)

表目次

- 表1 御崎谷II遺跡と周辺の遺跡一覧
表2 陶磁器集計表
表3 瓦集計表
表4 觀察表

図版目次

- カラー図版1 御崎谷II遺跡と日本海
カラー図版2 御崎谷II遺跡全景
カラー図版3 日本海から御崎谷II遺跡を望む（南から）
日本海から御崎谷II遺跡を望む（東から）
カラー図版4 陶磁器セット 陶磁器（1）
カラー図版5 陶磁器（2）
カラー図版6 陶磁器（3） 陶磁器（4）
カラー図版7 陶磁器（5）
カラー図版8 陶磁器（6）
カラー図版9 ガラス製品（1） ガラス製品（2）
カラー図版10 ガラス製品（3）
カラー図版11 ガラス製品（4）・ダニエル電池
図版1 御崎谷II遺跡と御崎谷遺跡（1）
図版2 御崎谷II遺跡と御崎谷遺跡（2）
図版3 岬地区航空写真（1947年米軍撮影）
図版4 岬地区航空写真（1965年国土地理院撮影）
図版5 溝査前状況（南より）
図版6 建物1 完掘状況（南より）
建物1 調査状況（南より）
図版7 建物1 石垣（南西より）
建物1 完掘状況（東より）
図版8 建物2 完掘状況（東より） 建物2 完掘状況（北東より）
図版9 建物2 石敷（西より） 建物2 石敷（北東より）
図版10 建物2 白色物質敷き造構（東より）
建物2 磚石及び盛土状況（南東より）
図版11 建物3 完掘状況（東より） 建物3 完掘状況（北西より）
図版12 石橋完掘状況（南西より）
井戸跡（北西より）
図版13 建物1 大甕検出状況（南東より）
陶磁器出土状況（西より）
図版14 陶磁器
図版15 瓦（漚振・大熨斗・割熨斗） 瓦（軒瓦） 瓦（棟瓦）
図版16 瓦（1） 瓦（2）
図版17 瓦（3） ピール瓶銘 石製品（1）
図版18 石製品（2） 金属製品 御崎谷遺跡出土古鏡

第1章 調査に至る経緯

現在の隠岐空港は、YS-11型機によって運航されている。しかし、同型機はすでに製造中止の上に数年後には退役が予定されている。その後継機としてジェット機が考えられた。またジェット化は交流人口の増大化・地域活性化・定住化を図る上でも最適であるとされ、早急にジェット化に円滑に移行できるよう空港の整備事業が計画された。

この計画に伴う埋蔵文化財調査については、平成8年から周辺事業予定地内も含め隠岐島後教育委員会・島根県教育委員会によって遺跡の分布調査が実施された。これによって空港整備事業予定地内に御崎谷遺跡・大床遺跡・東船遺跡の3か所で遺跡の存在が明らかになった。

・御崎谷遺跡（西郷町大字岬町字御崎谷）

・大床遺跡（西郷町大字岬町字大床）

・東船遺跡（西郷町大字今津字東船）

分布調査の成果を基に、遺跡の取り扱いについて協議が行われ、御崎谷遺跡・大床遺跡については、遺跡の時代・性格について不明確な点が多いことや近代以降の新しいものである可能性があつたが、地元の要望等もあり調査を行うこととなった。

そして、隠岐島後教育委員会により平成9年には、遺跡の広がりを確認するため東船遺跡の範囲確認調査が行われた。これにより東船遺跡の調査範囲が確定することとなった。以上の分布調査、範囲確認調査を基に埋蔵文化財調査の基本計画が協議され、現地調査については、島根県教育委員



第1図 御崎谷II遺跡の位置

会が平成10年度～平成12年度の3か年で基本的に行うこととなった。また、埋蔵文化財調査を円滑に進める上での調査地の用地買収・重機による表土掘削・立ち木伐採・発掘作業員確保等の環境整備について協議し、本格的な調査を実施する上での準備は整えられた。

現地調査は、平成10年度に御崎谷遺跡・大床遺跡・東船遺跡の3か所について行い、11年度以降については、東船遺跡の調査を継続して行うこととなった。

また、平成11年度には、地元住民の方からの指摘と文献資料から御崎谷遺跡と大床遺跡の中間地点の谷奥に遺跡が存在することが新たに確認された。この新たに発見された遺跡を御崎谷Ⅱ遺跡として平成12年度に調査することとなった。

平成10年度の調査は4月から諸準備をおこない、1パーティで同年6月に御崎谷遺跡から実施し同年8月からは大床遺跡の調査を開始した。この2遺跡については同年9月には調査を終了し、それ以降同年12月まで東船遺跡の調査を行い、平成10年度の現地調査は終了した。

平成11年度の調査は、調査班を2パーティに増やして4月より実施した。遺跡は前年度から継続して東船遺跡の調査を実施し、同年12月に終了した。

平成12年度は、前年度同様に東船遺跡の調査を4月より実施した。11月からは御崎谷Ⅱ遺跡の調査も並行して行い、同年12月に両遺跡の調査を終了した。この段階で、東船遺跡の調査予定範囲のうち調査を実施できなかった部分が残ることとなったが、それについては協議の結果、島後教育委員会によって平成13年度に調査を実施することが決定した。

今回報告する御崎谷Ⅱ遺跡（西郷町大字岬町）は、平成12年度に調査を実施したものである。

第2章 調査の方法と調査経過

第1節 調査経過

御崎谷Ⅱ遺跡が位置する谷は大山隠岐国立公園内の特別区域第2種にあたり隠岐支庁空港建設局から特別区域の解除申請を行っていただき、申請が認められたのち調査を行った。調査は平成12年11月1日より発掘作業を開始した。まず、立ち木の伐採を行い地表面に現れている遺構の有無を確認した。その結果礎石建物が最低2棟、井戸跡1基が確認された。その結果を踏まえ、さらに遺跡の広がりと遺構の様相を確認するために、11月8日に12本のトレンチ（1m×1m程）を設定した。その結果大床山の裾（北山区と名付けたが実際は遺跡の西側にあたる）に遺物が集中して廃棄されていること、遺構内にはほとんど遺物が出土しないことが判明した。11月9日からは建物1・2の調査と並行して表土層の除去を行い、建物3と石橋、溝が検出された。12月13日には御崎谷Ⅱ遺跡の写真測量及び空撮を行い、12月14日に調査は完全に終了した。

第2節 調査の方法

現地の立ち木を伐採後、地形の変化が認められ、また礎石建物が確認できた。しかし、表土の堆積状況や地形の変化の度合いが不明であったため、トレンチ調査を先行して行い、旧表土と盛土を確認した。旧表土は全く遺物の出土しない無遺物層で、御崎谷Ⅱ遺跡の立地する谷の堆積土層であった。旧表土の上には盛土が施され、その上に表土が覆うといった状況であった。盛土と表土は遺物を包含しており、表土と盛土は人力で掘削した。

礎石建物等の遺構は、土層や礎石の図化・写真等の記録を行った。そして完掘後には、遺跡全体の図化（25cmコンタ・1/50）及び撮影を空撮で行った。

また、遺跡から出土する遺物については、その出土状況が廃棄された状況を示すものと考えられたので、細かな出土状況の記録は行わず、各遺構と遺跡を方位にしたがって大きく分けた区域で一括して取り上げた。

（出土遺物の検討）

分類して、同型式のものは1～数点を図化し掲載した。また、小片のものはほとんど図化を省略している。

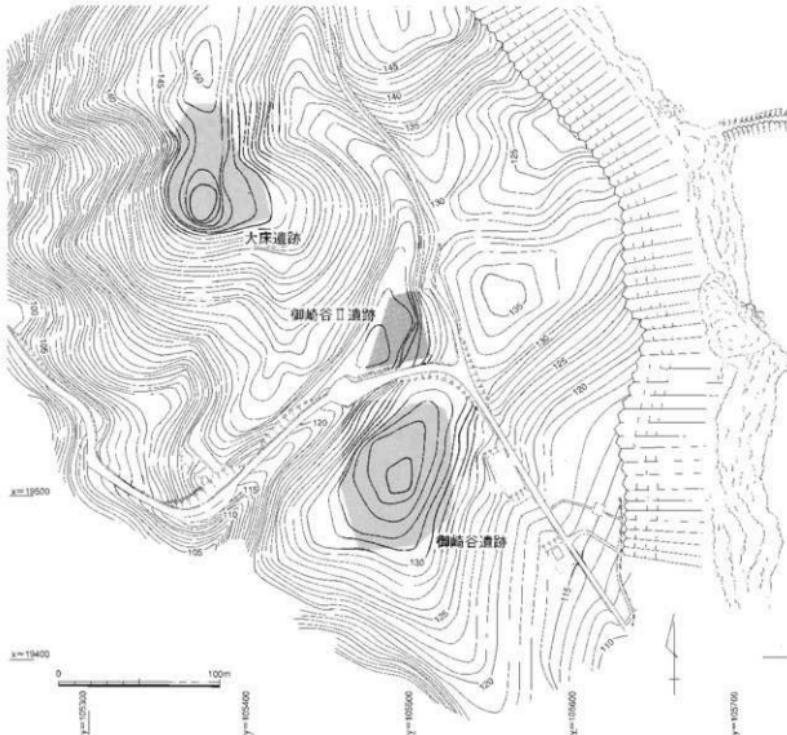
第3章 遺跡の環境と歴史的背景

第1節 遺跡の位置と立地

御崎谷II遺跡は、隱岐郡西郷町大字岬町に所在している。遺跡はその所在地の地名が示すように南面する日本海に突き出た岬の尖端部分に位置している。そこはちょうど隱岐島後の玄関口である西郷湾の入り口に当たる場所である。また、岬の先端には、1921（大正10）年3月に日本初の国産レンズを付けた「西郷岬灯台」が設置されている。

遺跡は北西側を大床山、東・南側を小高い丘陵に挟まれた標高121m程の谷に位置している。眺望は谷の下方が辛うじて開けているだけで、非常に悪い。

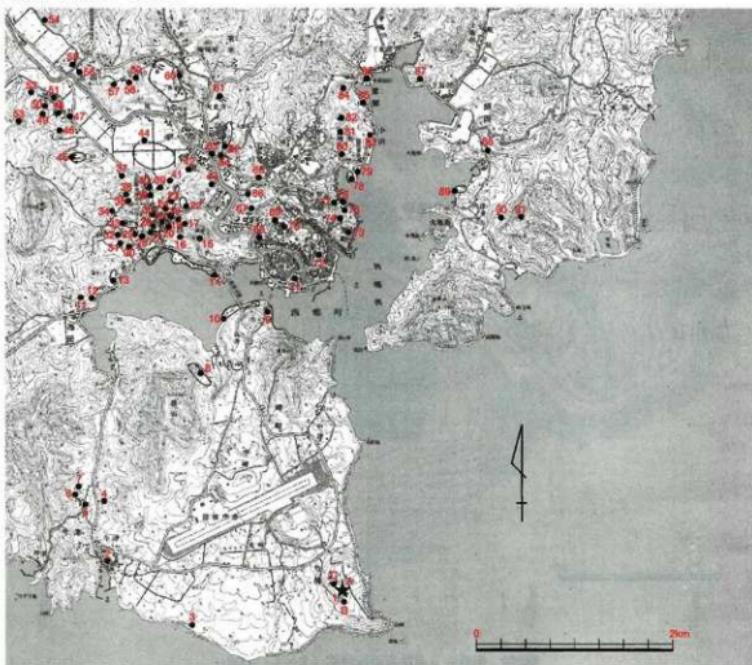
大床山山頂には第二次大戦中に防空監視哨として使用されていた大床遺跡があり、南側の丘陵には明治の海軍望楼であった御崎谷遺跡がある。この両者は、南側には日本海が広がり、晴れた日には島前のみならず本土をも望むことができる眺望の非常に開けた位置にあり、監視を中心とした戦争遺跡としての性格を窺うことができる。



第2図 御崎谷II遺跡周辺地形図 ($S=1/3000$)

第2節 周辺の遺跡と歴史的背景

遺跡の存在する島後の西郷湾周辺では、多数の遺跡がこれまで確認されている。旧石器時代では、隠岐空港の事業地内である今津所在の東船遺跡で台形様石器と繩石刃核が出土し、約3～2万4千年前まで隠岐島における人類の歴史を遡ることが可能になった^④。また、同じく今津に所在する森遺跡では旧石器時代から縄文時代初め頃の尖頭器が出土している^⑤。縄文時代では、東船遺跡から早期末から前期前半の纖維土器がみつかっている^⑥。宮尾遺跡からは前期に遡る土器が発見されている。そして、弥生時代の遺跡では、月無遺跡で弥生時代前期～中期の遺物が出土しており、いち早く稻作農耕が開始されていることが分かる。また弥生時代後期後葉には、山陰地方で首長墓として築かれていた四隅突出型墳丘墓が大城遺跡で見つかっている。また古墳時代には、隠岐を代表する古墳群の中心地の一つであり前方後円墳が多数築造されている。このように本土との密接な繋がりを保つつつ、西郷湾周辺特に矢尾川流域と玉若酢神社周辺では、各時代の人々の痕跡を多く確認することができる。一方で、御崎谷Ⅱ遺跡や御崎谷遺跡、大床遺跡の所在する岬町南側の台地上では、黒曜石の散布地が散見されるのみで、明確な遺跡は認められない。またこの台地上は開拓が行われる戦後まで本格的に集落が営まれたことは無かったようである。近代に入り、これまでの調査で検出した遺跡や西郷岬灯台が1921（大正10）年に設置されるまでは、あまり人の手が加わった場所ではなかったようである。



第3図 御崎谷Ⅱ遺跡と周辺の遺跡 ($S=1/50000$)

地図番号	遺跡名概要	地図番号	遺跡名概要
A	御崎谷Ⅱ遺跡 海軍望楼官舍跡、近代	46	中山古墳群 古墳3基(墳形不明)
1 B	御崎谷遺跡 海軍望楼跡、近代	47	小安神社古墳 古墳、前方後円墳、葺石他
C	大床遺跡 防空監視道路、近代	48	平東古墳群 円墳2基
2	東船遺跡 集落跡、旧石器～中世	49	釜山古墳 古墳、割石
3	国主塚古墳 円墳	50	平西の古墳 円墳、横穴式石室
4	森遺跡 集落跡奈良時代	51	平神社古墳 前方後円墳、石室、葺石、埴輪
5	奥田Ⅰ遺跡 包含層、須恵器、土師器	52	本先古墳 円墳、石棺、土師器、須恵器
6	奥田Ⅱ遺跡 集落跡、須恵器、土師器	53	小城跡 城跡
7	奥出Ⅱ遺跡 集落跡、須恵器、土師器	54	高宮遺跡 敷石地、土師器
8	鏡の山横穴墓群 20基以上、壁面、須恵器、玉類	55	船ヶ谷古墳 古墳(墳形不明)
9	高井山古墳 円墳	56	鶴岐同分寺跡 寺院跡、燧石、軒半瓦
10	くだりま遺跡 敷石地、石鐵	57	野中西遺跡 敷石地、須恵器
11	西田古墳 円墳	58	野中東遺跡 敷石地、須恵器
12	磯中学校脇古墳 古墳、刀子、龜先、須恵器他	59	高城遺跡 敷石地、土師器
13	大座古墳群 円墳3基	60	尼原山遺跡 掘建柱建物跡、鉄器、瓦、須恵器
14	下西海岸遺跡 敷石地、縄文土器、石鐵	61	大光寺跡 寺院跡、石垣
15	阿府尾城跡 城跡	62	名田古墳群 占墳3基(円墳、前方後円墳)
16	白愛古墳群 占墳4基	63	月無遺跡 敷石地、弥生土器、木器他
17	国府原館跡 駐跡	64	八田横穴墓群 横穴墓、須恵器
18	甲の原古墳群 古墳4基	65	要木遺跡 敷石地、土師器、須恵器
19	甲の原古墳群 山古墳5基	66	大城遺跡 敷石地、弥生土器(スタンプ文)
20	大羽草遺跡 敷石地、須恵器、黒曜石	67	大城西隅突出型丘墓 猿生七器、菅笠
21	大羽草遺跡 敷石地、須恵器、黒曜石	68	大川神社古墳 占墳、円墳、横穴式石室
22	龍木原遺跡 敷石地、須恵器	69	西郷小学校1号墳 古墳、円墳
23	龍木原古墳群 古墳8基	70	西郷小学校2号墳 古墳、円墳
24	龍木原古墳群 古墳9基	71	天神古墳群 占墳、円墳2基、葺石
25	甲の原遺跡 敷石地、須恵器、黒曜石	72	西郷公園古墳 古墳、円墳
26	宮の前遺跡 敷石地、須恵器、黒曜石	73	半筋古墳群 横穴墓
27	宮の前1号墳 古墳、円墳	74	清久寺裏遺跡 敷石地、古錢、齒組器
28	宮の前2号墳 山古墳、凹墳	75	ヘギ遺跡 敷石地、土師器、須恵器
29	玉若酢命神社境内古墳群 円墳4基	76	ヘギ古墳 古墳、土師器、須恵器
30	岩泉古墳 円墳	77	登凡トンネル遺跡 敷石地、須恵器
31	神殿古墳群 円墳5基	78	宮尾古墳群 占墳、円墳5基
32	神殿古墳群 古墓40基以上、塔婆	79	宮尾遺跡 集落跡、縄文土器、石器他
33	玉若酢命神社古墳群 14基、前方後円・円墳、須恵器他	80	神米遺跡 敷石地、土師器
34	権母寺跡 寺院跡、燧石、軒平、丸瓦	81	神米古墳群 古墳3基
35	椿古墳 円墳	82	小田横穴墓 横穴墓、須恵器
36	下西御崎神社古墳群 円墳2基	83	小田西光寺古墳 古墳、円墳、石室、勾手、刀削
37	ヒノメサン古墳群 古墳2基	84	宮田城跡 城跡
38	馬場遺跡 敷石地	85	小出古墳 古墳、円墳
39	森京谷南古墳群 山古墳2基	86	水底高校西側横穴墓 横穴墓、須恵器
40	ハサコ古墳群 4基、円墳、前方後円墳	87	飯田小学校裏古墳 古墳、須恵器、土師器
41	森京谷古墳群 古墳4基	88	津井古墳群 古墳2基
42	出井古墳 古墳、墳形不明	89	淡路跡 集落跡、绳文・弥生土器他
43	H町古墳 円墳	90	蓮寺古墳 寺院跡
44	矢尾川流域条里遺跡 条里遺跡	91	蓮寺寺山跡 程跡
45	中山遺跡 集落跡、夢穴住居跡、須恵器他		

表1 御崎谷Ⅱ遺跡と周辺の遺跡

第4章 御崎谷Ⅱ遺跡の遺構と遺物

第1節 調査前の状況と概要

調査前の遺跡の状況は山林であった。さらに強風により倒れたと思われる杉の大木が何本も折り重なっていて、周囲からは遺跡が存在することが確認しづらい状況であった。

伐採後は、平坦面を広げるために谷の斜面を削るなどの地形の改変が明らかになり、また建物の石垣や礎石が表土から現れており、建物が2棟あることも確認できた。しかしそ他の遺構は表土に埋まっており、この時点では確認できていなかった。

では、以下に遺構毎の説明を述べていく。

第2節 磂石建物跡

1. 概要

当遺跡からは、礎石建物跡が3棟確認されている。建物1と建物2は根固めの石の上に礎石を載せたもので、建物3は根固めの石を持たない。建物の規模は建物2、1、3の順となる。3棟の建物の主軸は若干異なっているものの、ほぼ同じ方向を示している。建物1は御崎谷遺跡の敷地跡から検出された建物跡と規模や構造がほぼ同じである⁶。

2. 建物1（第5図）

建物1は谷の中央近くに位置していて、石垣を伴う基礎を持つ礎石の建物である。また、周辺から瓦が出土しており、瓦葺きであった可能性も考えられる。

基礎は旧表土の上に盛土を施し、そこに石垣を積み上げている。直徑40cmほどの角礎を主に用い、右垣の上面を標高122mに揃えているようである。南西側の石垣は、向かって右側の一部が崩落していた。南東側の石垣も上面が崩れていると思われる。北東側の石垣は礎ではなく、約80cmの角柱状の切石を横に敷き、基礎としている。これらの内側は裏込めの石などは無く、盛土のみであった。

建物はこの基礎の上に、拳大の礎を根固めとして積み上げ、その上に直方体あるいは台形に加工した礎石を設置している。根固めの礎は自然礎で、この周辺に堆積している通称「かば」⁷と呼ばれる土層に含まれているものである。礎石の厚さは20cm程度のものが多い。また加工時の工具痕を残しているものが多く、工具痕を消しているものはほとんどなかった。石材は不明である。

なお、礎石10と27は根固めの石が無いもので、動いている可能性がある。また、礎石3と12、23、24は原位置を保っていないと考えられるが、根固めの石には載っており、わずかに位置がずれているものと考えられる。30と39は根固めの石のみ残っていた。礎石35の南側のものがいずれかの礎石となる可能性が高い。

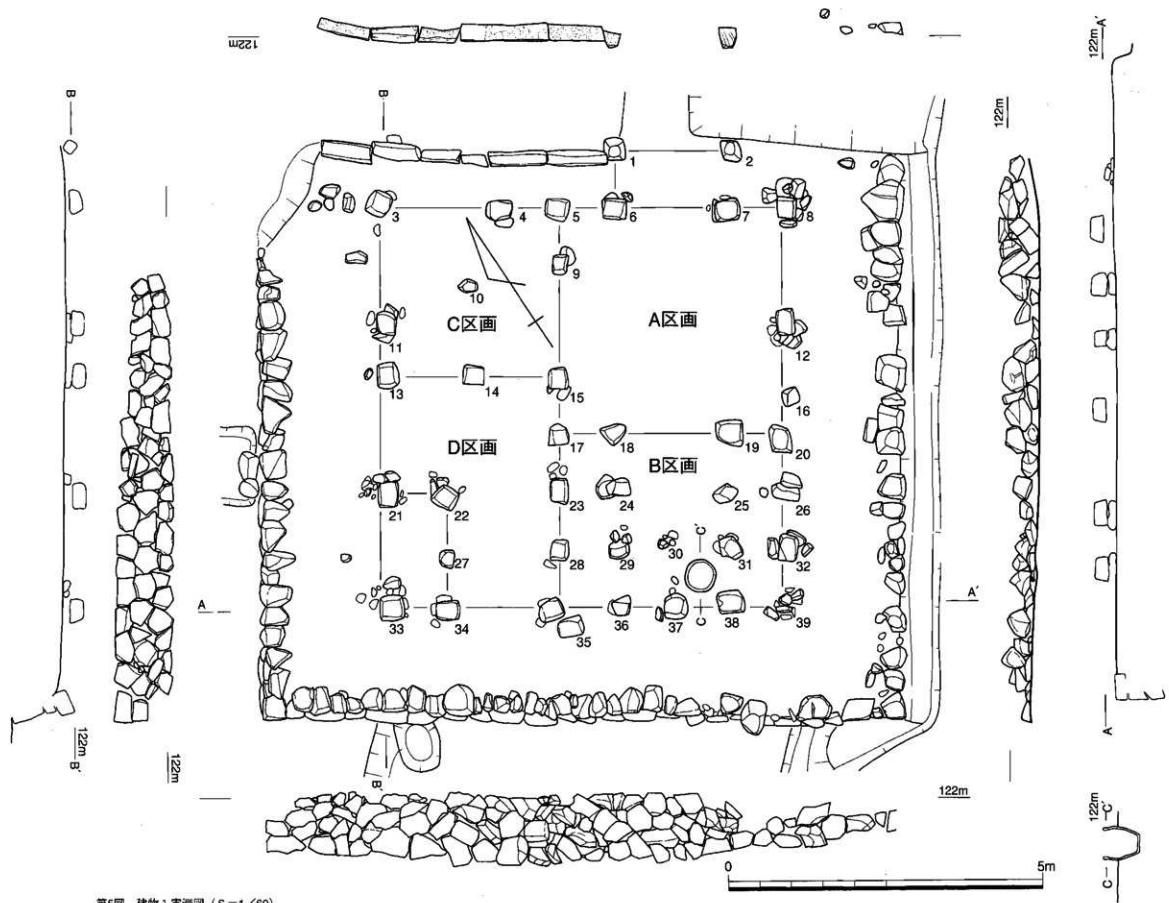
礎石は、基本的に1間（約182cm）、または半間（約91cm）の間隔をもって配置されている。

建物は大きく分けると、一辺が6m程（3間半）の方形の建物と半間×1間程度外に張り出した（礎石1-2）部分に分けられる。礎石1-2は建物1の出入口ではないかと考えている。実際、開化できなかったが礎石1-2の外側（北東側）の盛土は若干盛り上がっている様に感じられた。また後に報告するが、御崎谷Ⅱ遺跡の出入口として考えられる右側が礎石1-2側にあることもそう判断した理由の一つもある。

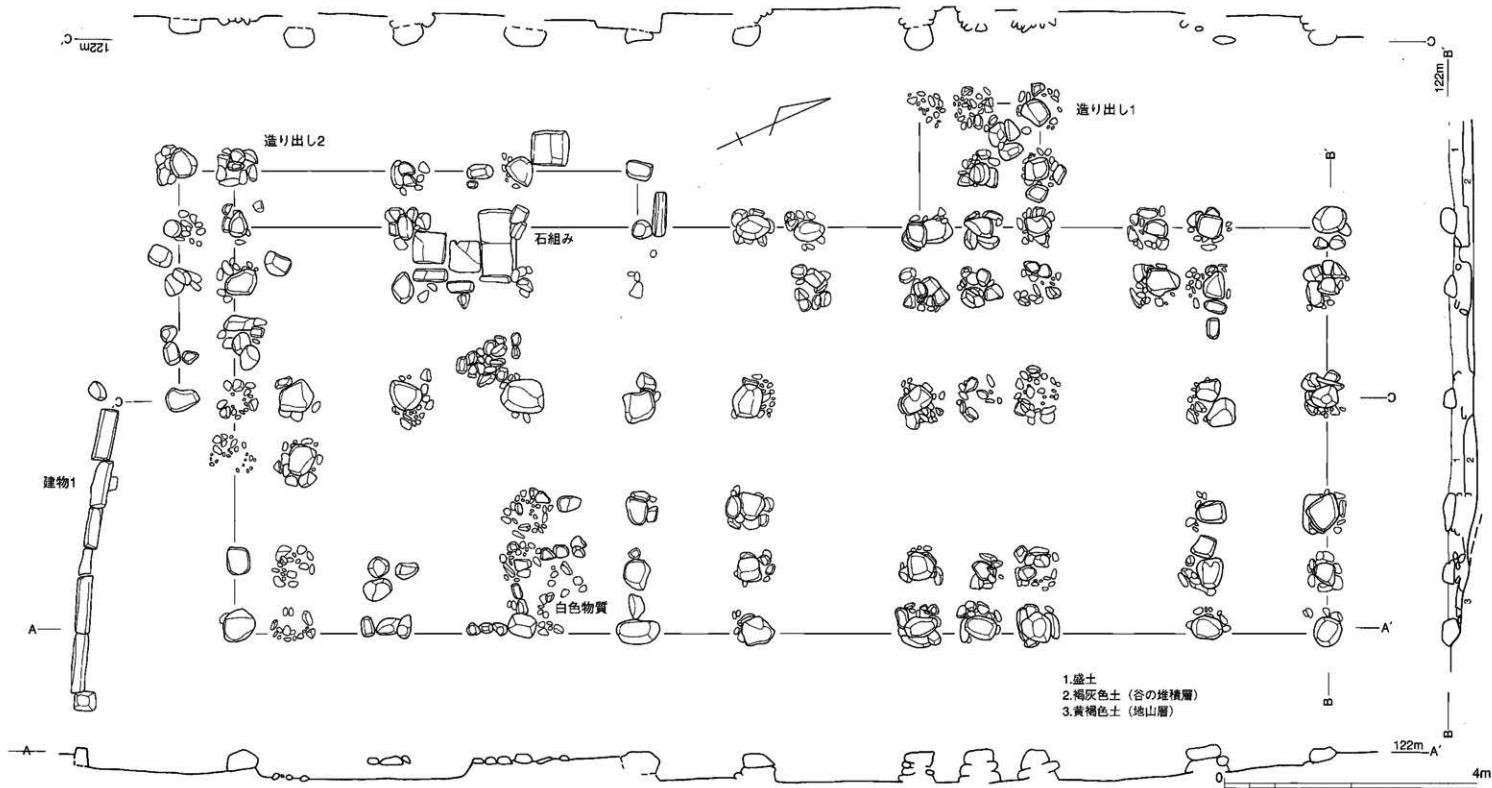
次に、建物本体は4区画（A区画・B区画・C区画・D区画）に分けられる。



第4図 調査終了後平面図 (S = 1/125)



第5図 建物1実測図 ($S=1/60$)



第6図 建物2実測図 ($S=1/60$)

A区画（2間×2間）は山入口と見られる礎石1～2のすぐ内側で、内側に礎石ではなく「土間」であったと考えている。B区画（1間半×2間）は4区画の中で最も礎石が密集しており、大甕も埋設されていた。この大甕はトイレあるいは水甕として使用されていたのではないかと考えられる。しかし内容物の分析も行っていないので不明である。B区画の礎石は密集しており床や重量のあるものを支えていたと考えられる。C区画（1間半×1間半）は礎石10が原位置を保っていない可能性があり、内側に礎石のない土間かもしれない。D区画（2間×1間半）は礎石21～22と礎石33～34の範囲が何らかの施設、例えば押入などがあったと考えることも出来るが、B区画とD区画は当時の姿を推定するのは難しい。

以上のように建物1について検出された遺構から、推測ではあるが建物の間取りなどを考えてみた。

3. 建物2（第6図）

建物2は遺跡のほぼ中央にあり、最も規模の大きな遺構である。

長さ約17.4m（9間半）、幅約6.4m（3間半）の長方形を基本形とし、2か所に造り出しをもつていてる。

礎石を設置する前に、まず谷に堆積した褐色土層の上に黄灰色土の盛土を施している。その上から30cm前後の穴を掘り、根固めの石を埋めた後に礎石を設置している。根固めの右は建物1とほぼ同じ拳大の自然石を使い、礎石は直径60cm前後の大きさで、平坦面を持つ砾を使用している。厚さは様々あったが、25cmぐらいが主であった。

造り出しへ西側（造り出し1）と南西隅（造り出し2）の2か所にあり、造り出し1は1間×1間の方形で、造り出し2は半間分、庇状の飛び出している。

礎石は原位置を保っているものが半分ほどで、根固めの石のみ残っているものや、根固めの石に載ってはいるものの原位置ではないものも多い。

建物2には建物1には無かった石組みと白色のコンクリート？を敷いた部分が各1か所あった。

石組みは南西隅の造り出しに接しており、およそ1.7m×1.2mの範囲に丁寧に加工された切石を敷いている。切石は50cmの方形で厚さ15cmの石材を基本とし、それを半分に分割した2種類の石材を組み合わせて石組みを作っている。発掘中は谷側に抜ける裏口など想像していたが、ちょうど谷の中央に近く、標高が低くなっているので風呂場などの水場とも考えられる。

コンクリート状の白色物質を敷いた部分は東側にあり、後述する石橋の正面に位置する。白色で小石が混じり、漆喰にも思えるがここではコンクリート状としておく。礎石よりやや低い位置に敷いていたようであるが、残りが悪く範囲は確定できなかった。石橋の正面でもあり、出入口ではないかと考えている。

次に間取りであるが、建物1は基礎により隔離されていた上に面積もなく、また御崎谷遺跡で同じ構造の建物跡が検出されていたので間取りの検討なども可能であった。しかし建物2は範囲が広いため検討は難しい。更に、建物2として1棟の建物としているが、2棟あるいは3棟に分かれていた可能性も考えられる。

今後このような戦争遺跡の調査例が増えれば、類例も増加すると思われる。今後に期待したい。

4. 建物3（第7図）

建物3は建物2の西側に位置し、谷の一番低いところにある。北側には井戸跡がある。南東隅の礎石が一ヶ所欠けていたが、近辺に1点礎石が転がっていた。原位置を保っている礎石と全く同じものであり、建物3は1間×2間の礎石建物であったと推定する。楔固め石はない。礎石も建物1や2と異なり高さ約30cmの台形や直方体で、側面は加工時の工具痕を残しているものの、上面は丁寧に仕上げた石材を使用している。礎石の上面はほぼ高さを合わせている。盛土はなく褐色土層（谷の堆積土）に直接設置している。倉庫か何かであろうか。

第3節 溝・石橋（第8図）

建物群のある

平坦面の東端に

あり、斜面と平

坦面との境にな

る溝とその溝を

渡るために造ら

れたと考えられ

る石橋である。

溝は南北に掘

られており、覆

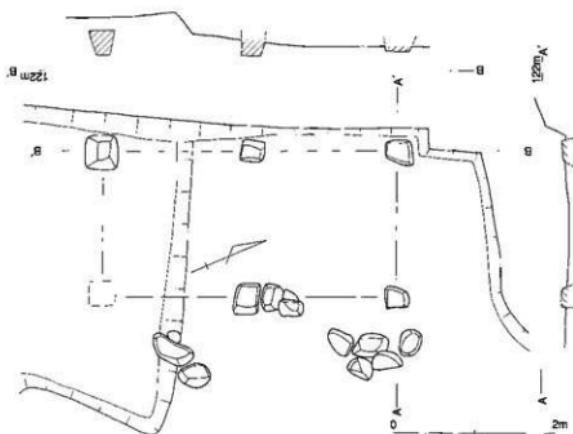
土からの遺物の

出土は無かつた。

溝の南側が

広くなっている

が、調査で掘り

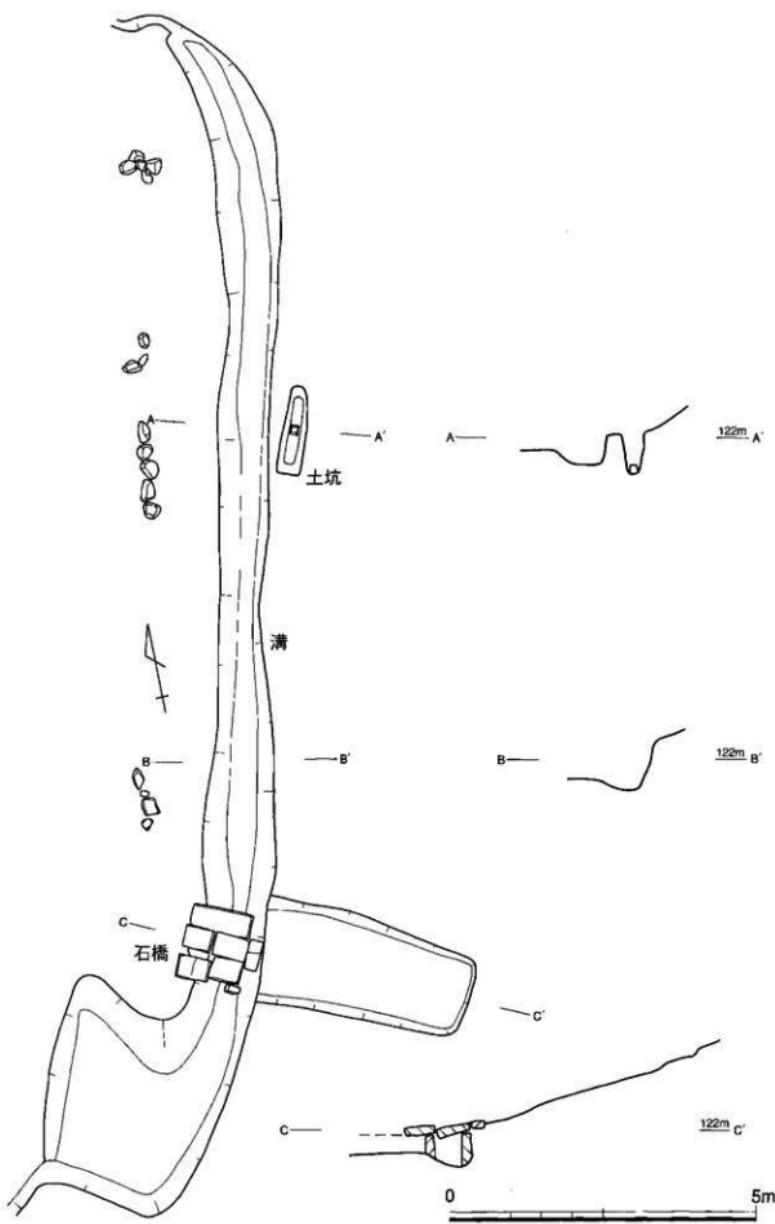


第7図 建物3実測図 (S=1/60)

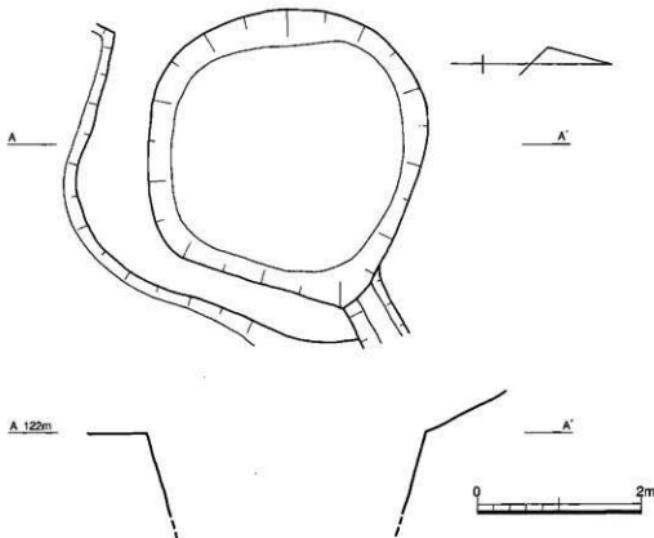
すぎている可能性がある。調査は岡化範囲のみ行っているが、溝はさらに南北に伸びていると思われる。機能としては、斜面から流れてくる水を排水する役目があると考えられる。実際、完掘後の溝には降雨の後に斜面から水が流れてきてよく溜まっていたことを記憶している。

石橋は上記の溝に架かる石製の橋である。長さがおよそ1mの板状の石材を脚部に2枚横にして立て、その上に同じ石材を3枚並べている。そのうち南側の2枚は中央付近で折れている。これらは全て同じ石を使っているが、石材は不明である。

石橋の東側斜面は調査前から崖地になっていたので、石橋の延長を一部分掘り下げている。その結果図面上には現れていないものの、石橋の延長は上に向かってわずかに斜面が掘られていると認められた。第2図にあるように現在は道筋に切られているものの、御崎谷II遺跡の南側には御崎谷遺跡がある。後述するが、御崎谷II遺跡と御崎谷遺跡は望楼と官舍という一体の設備であると判明している。当然御崎谷遺跡へと続く道があり、この石橋を使い斜面を上り下りしていたものと考えられる。



第8図 溝・石橋・土坑実測図 ($S=1/80$)



第9図 井戸跡実測図 ($S=1/60$)

第4節 土坑（第8図）

溝と斜面の間に掘られていた土坑である。深さは60cm以上あり、中央には15cmほどの直方体の切石が設置されている。石材は不明である。石の上に柱を立て、土坑を埋めて柱を固定した遺構であろう。

第5節 井戸跡（第9図）

井戸跡は御崎谷Ⅱ遺跡では1基検出されている。建物3の北側にあり、谷の一番底に造られている。

大きさは3.5m前後であるが、周囲が崩落しており造られた当時の大きさとは異なっている可能性が高い。また崩落の危険があるため内部の調査は行っていないため、深さは不明である。したがって井戸に伴う遺物の存在も不明である。

この井戸跡は湧水により水が溜まる井戸ではなく、降雨の後に斜面や谷を流れてくる水が流れ込んで溜まる井戸と考えられる。調査中も普段は枯れているが1日の降雨で井戸跡が満水になり、数日かけて徐々に水位が下がっていくといった現象が見られた。造った当时もこういった状況ではなかったかと考えている。

第6節 出土遺物

1. 概要

遺物の出土量は、遺構では遺物2が最も多く、建物1と建物3がそれに続く。溝からは出土していない。これらは遺構内で出土しているが廃棄されたものと考えられる。

遺構外では大床山の裾で、遺物3と井戸跡の西側に設定したトレンチ（北山トレンチ）から出土した遺物が質、量とも多く、上記の遺構出土遺物の合計よりも多い。このトレンチの周囲には膨大な遺物が廃棄されていたと思われる。

遺物は、陶磁器・瓦・ガラス製品・ダニエル電池容器・石製品・金属製品が出土している。

2. 陶磁器（第10～14図・表2）

陶磁器は表2に器種と分類、個数を表示している。

碗（第10図・第11図1～4） 碗は形状や大きさで4種類（大形、中形、小形、筒形）に細分できる。碗には坏も含んでいる。第10図10と11は小形の碗で「酒杯」であろう。12は全く同じものが御崎谷遺跡で出土している。21は模様や器形からセットであろう。

皿（第11図5～12） 11は陶器である。10は同一個体が御崎谷遺跡で出土している。

蓋（第12図1～6） 1～3は碗の蓋で1と5は陶器である。5は筒形の瓶の蓋かもしれない。6は急須の蓋であろう。

鉢（第12図10～12・第13図1～4） 12は御崎谷遺跡で出土した多角形の皿が接合したものである。接合したのは口縁部の一部で、大部分は御崎谷II遺跡から出土している。第13図1～4は陶器である。4は行平かもしれない。

片口（第13図1） 1は団化されていないが片口である。

土鍋（第13図6） 6は蓋の破片が出土しており、小片であるが団化している。

徳利（第13図7） 酒徳利である。鉄軸で「四町」「○錢」と書かれている。西郷町の西町か、屋号の可能性がある。

焜炉（第13図8） 内面上部がすくっている。使用時に付いたものと考えられる。

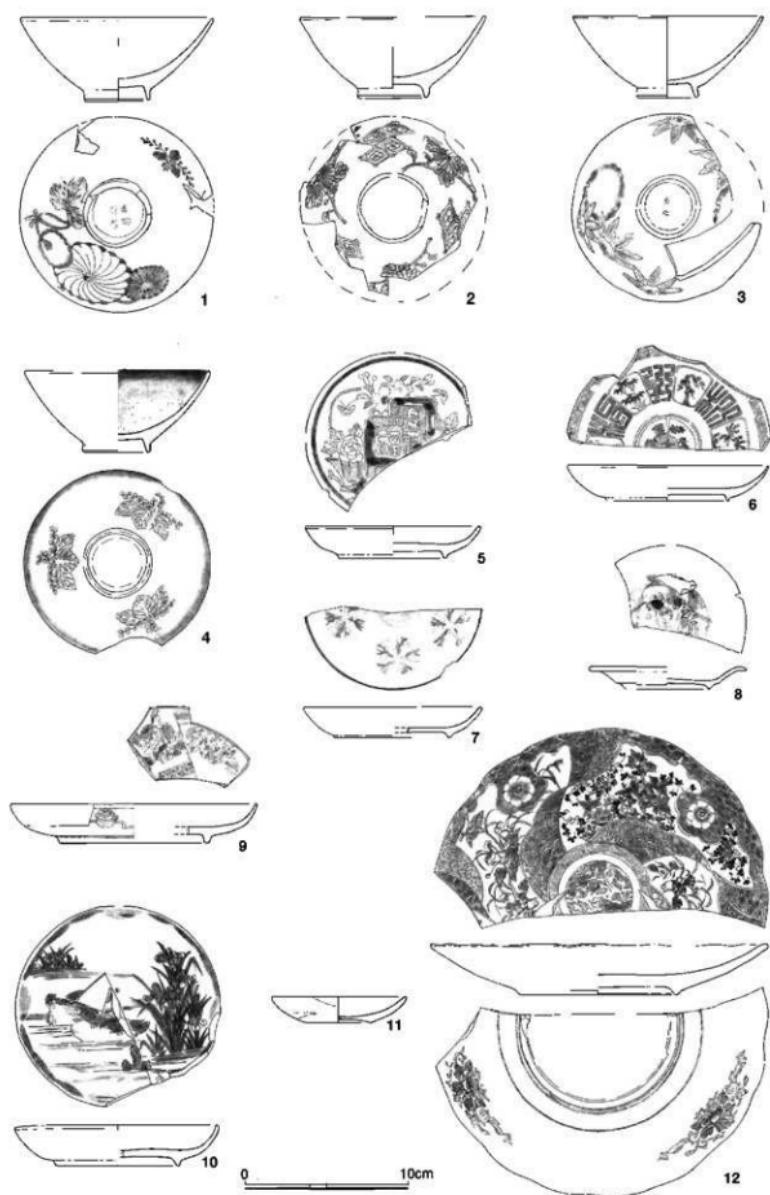
壺（第14図1・4） 1が小形、4が大形の壺である。両者とも底部内面に重ね焼きされる時に使用された窯道具の「ハリ」の日跡が付着している。形は長方形である。4は建物1（第5図参照）に据えられていたものである。石見焼の大壺で底部に墨書きの文字が記されていた。「四斗入 五升瓶式本 二升瓶三本 切片口三〇 在中」と書かれている。これは出荷時に逆さまにした大壺の内部に小形品を詰めているので、内部に詰めた小形品が何か分かるように記されていたものであるらしい¹⁸。

器種不明品（第14図2・3） 2は把手の可能性もあるが、用途は全く不明である。素焼きで、施釉もされていない。3は天地が逆の可能性もあるが不明品である。

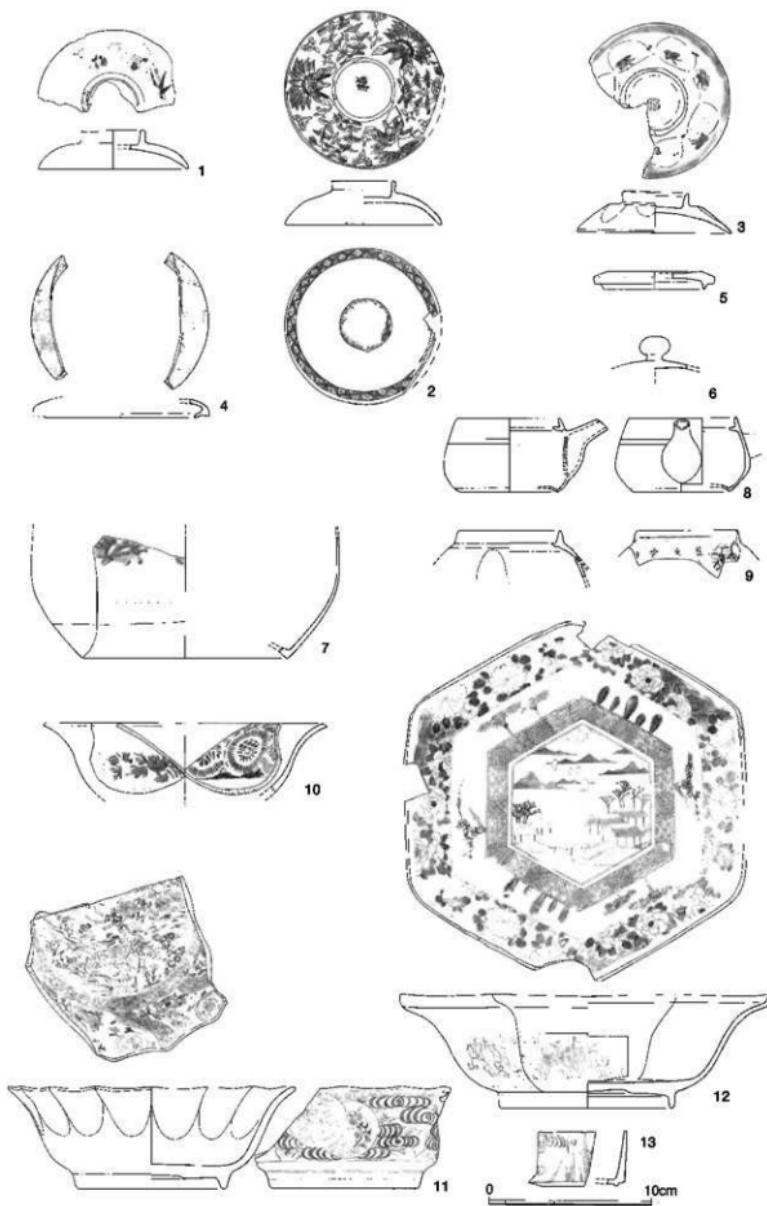
土管（第14図5） 素焼きの土管状の遺物である。3個体で環状になるものと見られるが、一応土管として報告した。長さは不明である。建物1の入り口の外側のみで出土している。



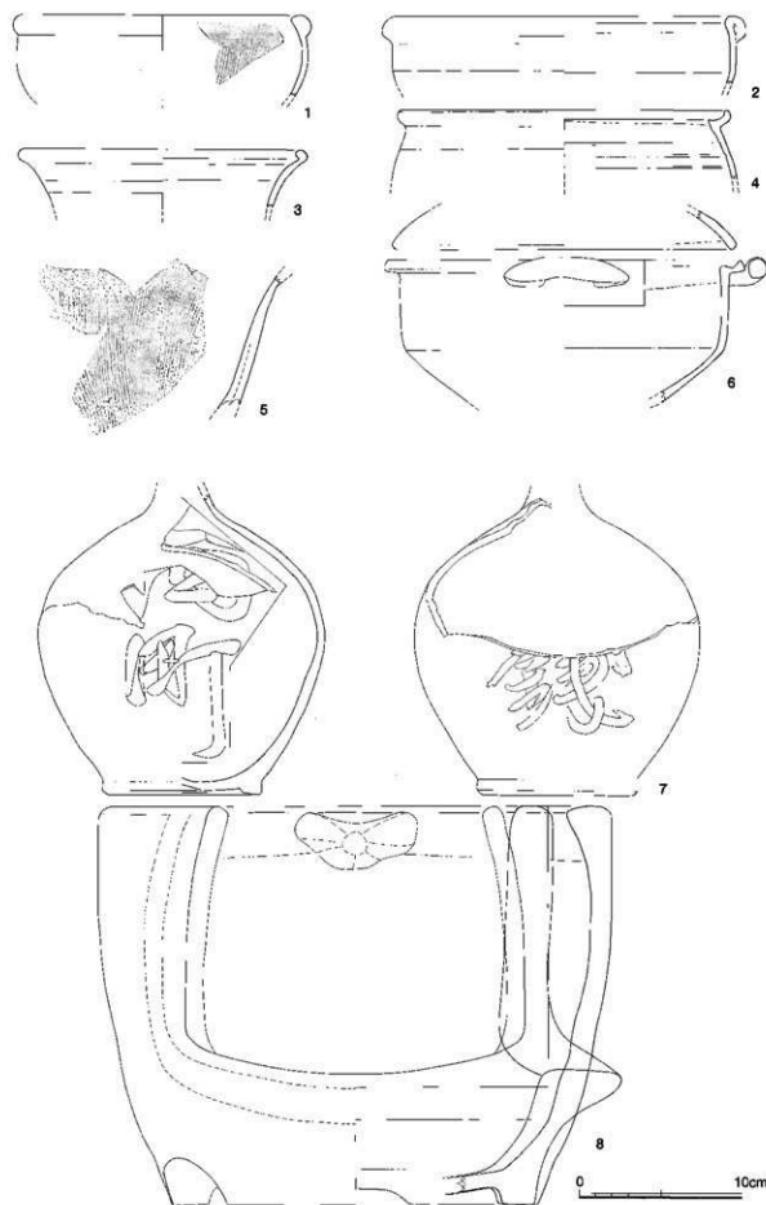
第10図 陶磁器実測図(1) (S=1/3)



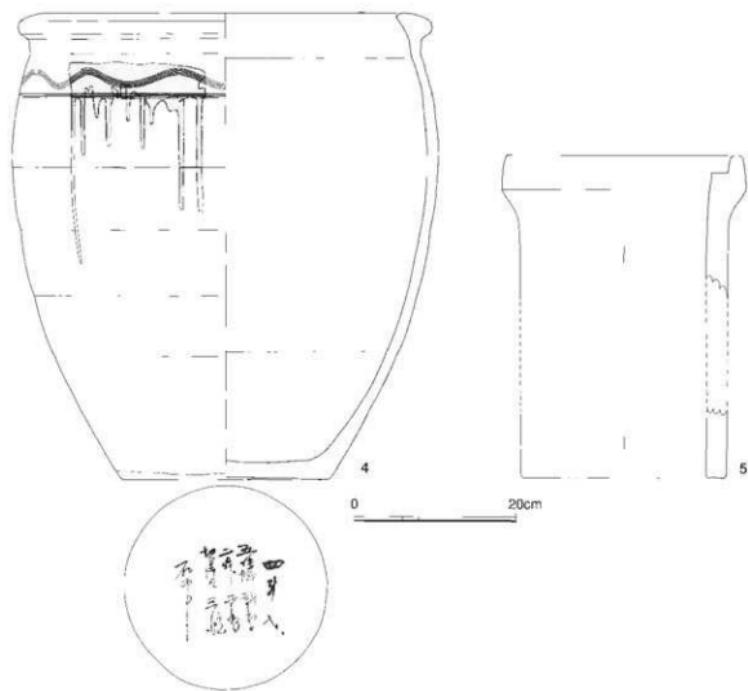
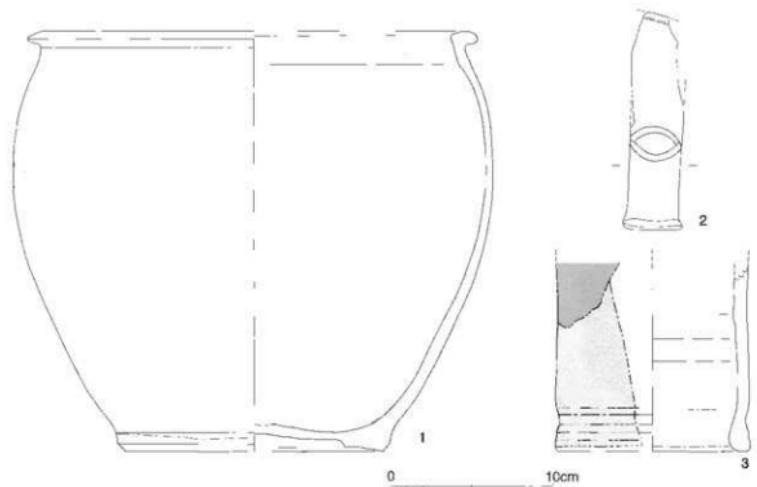
第11図 陶磁器実測図 (2) ($S=1/3$)



第12図 陶磁器実測図(3) ($S=1/3$)



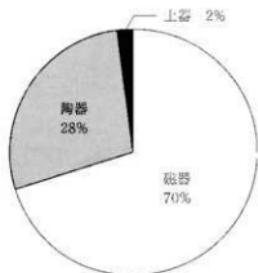
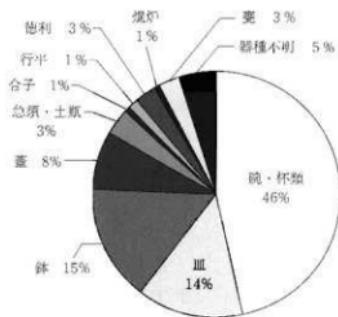
第13図 陶磁器実測図 (4) ($S = 1/3$)



第14図 陶磁器実測図 (5) ($S=1/3 \cdot 1/6$)

	磁器	陶器	土器	合計
碗・杯類	60	7		67
皿	19	1		20
鉢	6	16		22
蓋	8	3		11
急須・土瓶	4	1		5
合子	1			1
行平		2		2
總利	3	1		4
焜灼			1	1
壺		4		4
器種不明		5	2	7
合計	101	40	3	144

表2 陶磁器集計表



第15図 陶磁器比率グラフ

(2) 瓦 (第17~19図・表3)

瓦は釉薬瓦と焼成瓦が出土した。瓦の分類や個体数は表3に記述した。

雁振瓦 (第17図1・2) 雁振瓦は棟積の頂部に葺く瓦である。1は小片で不明だが、2は御崎谷遺跡で大形と分類されたものと同じである。帯状の棧を取り付ける接合面には、櫛目状の条線が刻まれている。

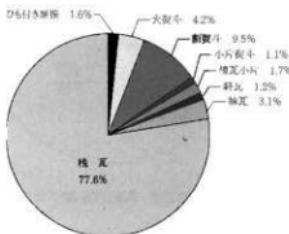
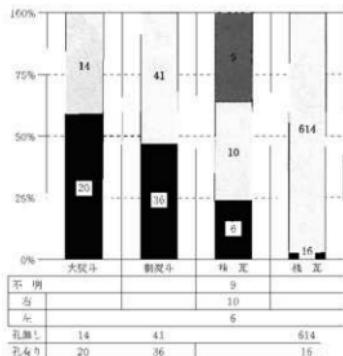
熨斗瓦 (第17図3~5) 熨斗瓦は棟積みに使う瓦であり、大熨斗 (3~4) と割熨斗 (5) が出土している。大熨斗は3が長いタイプ、4が短いタイプである。両者とも上面の全体に釉はかけていない。5は割熨斗であり、表面の中央に分割線が刻まれ、分割線寄りに孔が1つあいている。

袖瓦 (第17図6・7) 袖瓦は、屋根の妻側をおさめる瓦であり、左右のどちらかに袖板が付くものである。6は、左に袖板が付くもので、瓦と袖板の接合部には、縦方向の櫛目状の条線が刻まれている。7は右に袖板が付くものである。袖板の形状は6と変わらない。両者とも袖板が下半で切れているので、軒袖瓦ではない。

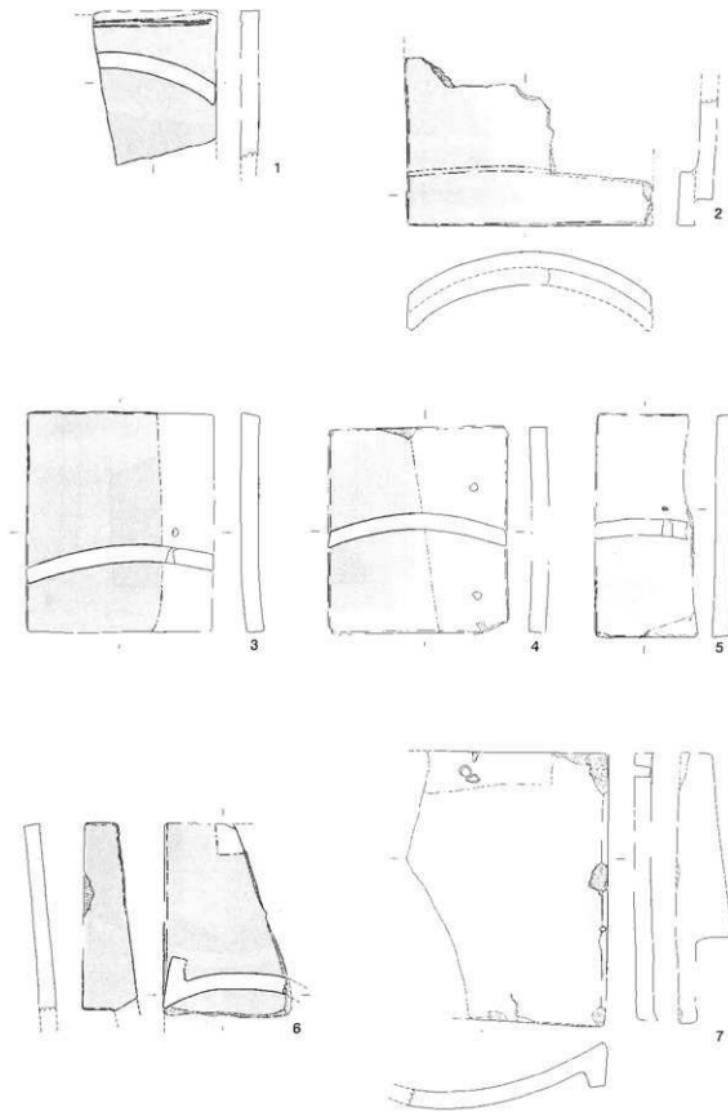
軒桟瓦 (第18図・第19図1) 軒桟瓦は、軒に施される瓦である。御崎谷II遺跡で出土した軒桟瓦は全て瓦当に文様を持つ。文様は第18図3・4・5の3種類確認できている。

棧瓦 (第19図2~6) 棧瓦は、屋根を葺く際に最も多く使うものである。小片で出土したため種別が確定できないほとんどが棧瓦と考えられる。第19図2は焼成瓦で右棧の棧瓦片の可能性と左袖瓦片の可能性がある。3~6は釉薬瓦である。釉薬瓦には左棧の棧瓦しか確認されていない。

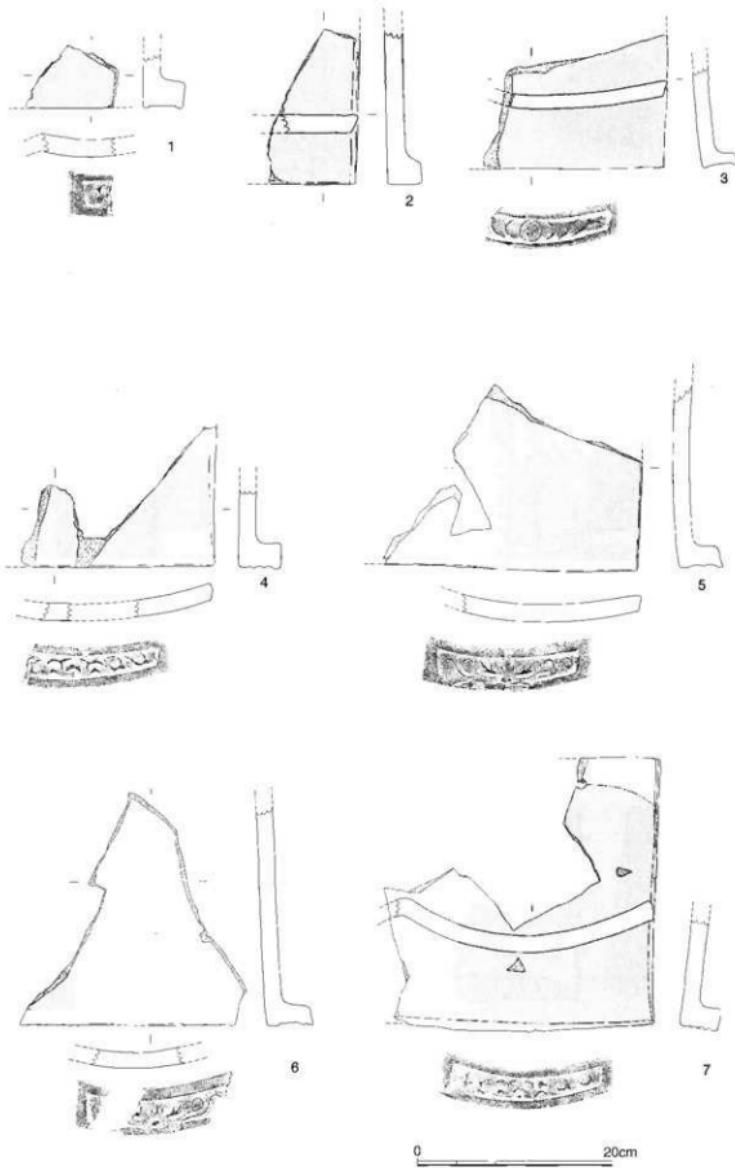
種類	種分	破片分類	合計
焼成瓦	鳩瓦	0	0
	ひも付き織機	15	15
	人頭斗	20	20
	割熨斗	14	14
	孔あり	36	36
	孔なし	44	44
	熨斗瓦	9	9
釉薬瓦	その他	14	14
	化粧瓦	0	0
焼成瓦	火瓦	10	10
	左	6	6
	右	10	10
軒桟瓦	不規	9	9
	左	0	0
軒柱瓦	左	0	0
	右	0	0
棧瓦	穴あき	26	26
	穴無し	614	614
その他		0	0
小片		5	5
合計		817	817



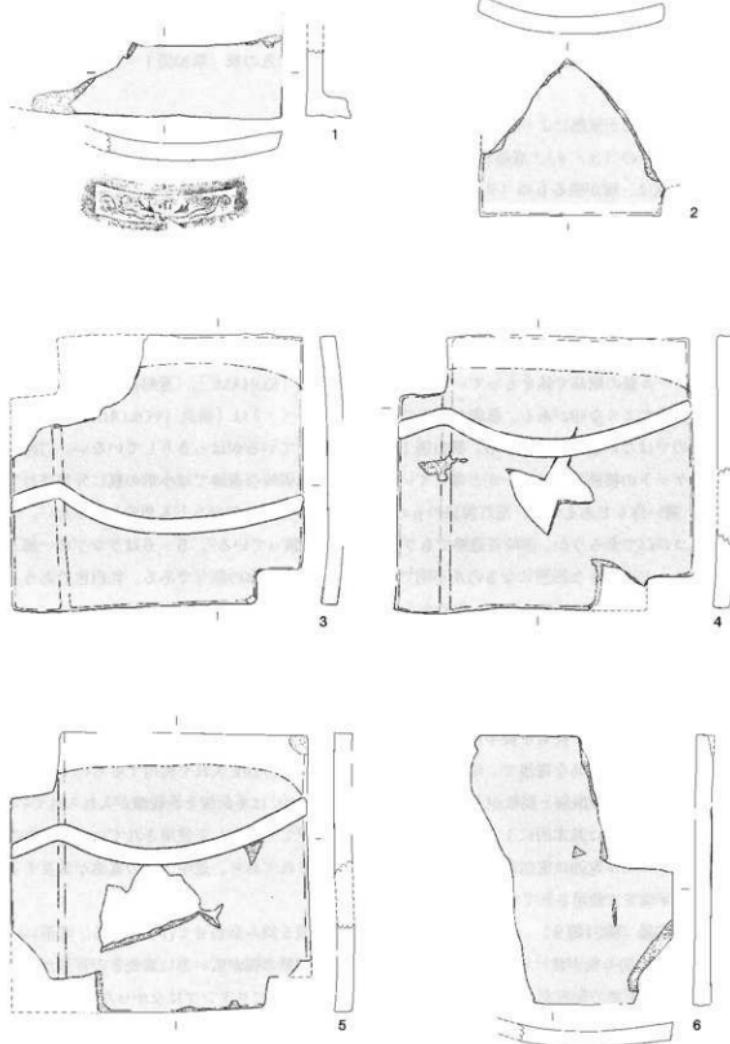
第16図 瓦比率グラフ



第17図 瓦窓洞図 (1) ($S=1/5$)



第16図 瓦窯測図(2) (S=1/5)



0 20cm

第19図 瓦実測図(3) ($S=1/5$)

(3) ガラス製品（第20・21図）

ガラス製品は、瓶、電球、フラスコ、ランプ、電球の傘、板ガラスが出土している。

瓶はビール瓶（第20図6～16）とその他の無色や青色、緑色の瓶（第20図1～5）とに分けられる。

1は口縁部だが被熱により歪んでいる。2～5は底部で、角がしっかりしているもの（2）、底部の角が丸いもの（3・4）、底部が厚いもの（5）に分けられる。4は被熱により変形している。

ビール瓶は、肩が張るもの（9）となで肩のもの（6～8・10）がある。さらに口縁部が頸部と接する部分に溝をもつもの（6・9・10）と溝がないもの（7）がある。底部は全て上げ底になっており、2段になる（15）以外は1段になっている。また1段の底部も底部の角に段を持つものの（13・14・16）と無いものの（10・12・15）があり、底部外面に模様をもつ（15・16）がある。上げ底の高さは一様ではない。ビール瓶は10が完形で、9が底部から口縁部まで残っていた。それ以外は破片である。

11はビール瓶の胴部で銘をもっている。上から「□D□」「KOHAM□」「登録商標」と読める。中央には太陽のような印がある。推測だが印の下のアルファベットは「横浜（YOKOHAMA）」と書いてあるのではないかと考えている。第21図1は電球と考えているがはっきりしていない。口縁部の溝がソケットの接続部ではないかと考えている。2～3は御崎谷遺跡では小形の瓶に分類されているが[◎]、薄い作りであるので、電灯関係のもの、例えばランプとか電球なども想定してみたい。4はフラスコの口であろうか。御崎谷遺跡でもフラスコとして扱っている[◎]。5・6はランプの一部と考えられる。どのような形態になるのか不明である。7は電灯の傘の部分である。乳白色である。8は板ガラスである。窓に使われていたのか、鏡として使っていたのか不明である。

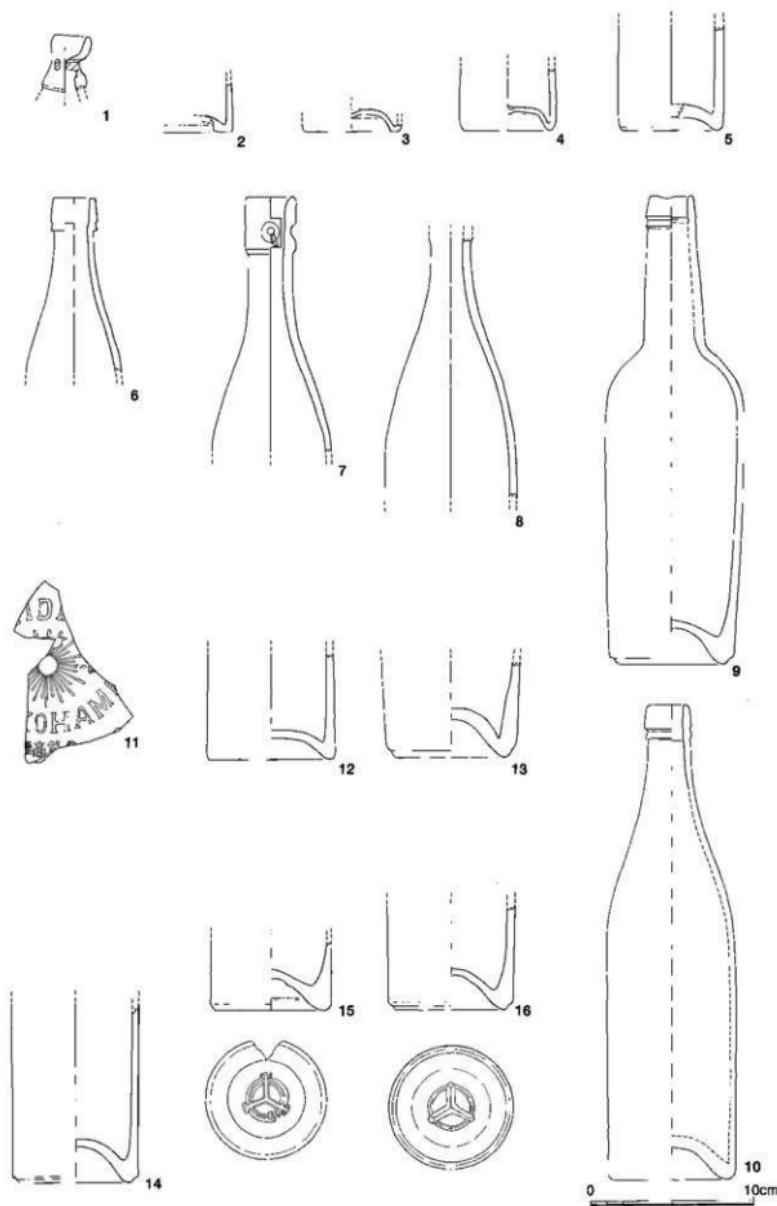
(4) ダニエル電池容器（第21図9～11）

遺跡からは白色の磁器とそれよりやや小さい素焼きの橙褐色の容器が出土している。これらはダニエル電池の容器で、前者を長平瓶、後者を楕圓瓶と明治頃には呼称していたものと思われる。ダニエル電池とは、簡易な電池で、磁器製の容器内に素焼きの容器を入れて使用するものである。白色磁器容器内には硫酸銅と銅板が入れられ、素焼きの容器内には亜鉛板と希硫酸が入れられていた。また実際の使用では基本的に1セットで1.1Vで、10個繋げて一組として使用されていた可能性がある。またダニエル電池は電信用電池として明治以来使用されており、途中、他の電池が普及するも昭和の前半頃まで使用されていたようである[◎]。

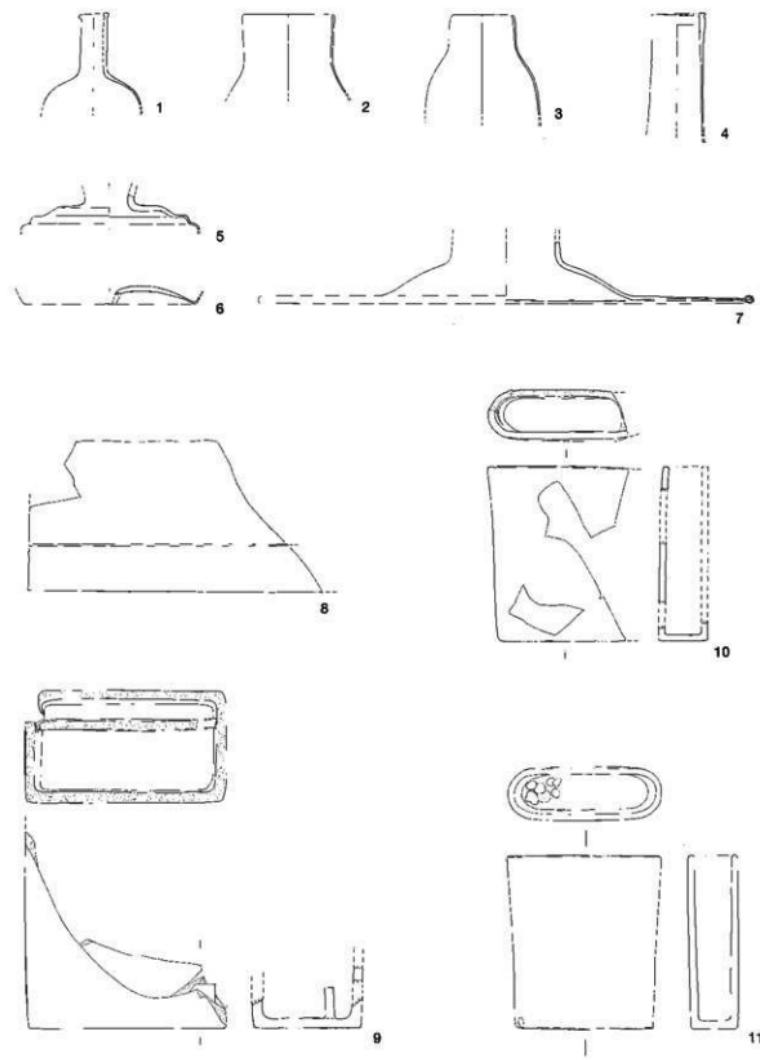
白色磁器容器（第21図9） 容器の形状は箱形で、斜止板を組み合わせて作っている。底部には高さ2cm程の仕切り板が設けられている。この仕切られた空間の幅が広い方に素焼きの容器が入れられ、狭い方に電極の銅板が入れられていたと推測される。底部にスタンプはなかった。

素焼きの容器（第21図10・11） 容器は底面が楕円形で、口縁にむかって外傾する容器であり、口縁より底部の長径が短くなっている。また規格的に作られたもので計測値が近似している。

10は内面に緑青などは確認されなかった。底部外面のスタンプも確認されていない。11の底部外面には「み」のスタンプがあり、内面には緑青が確認されている。

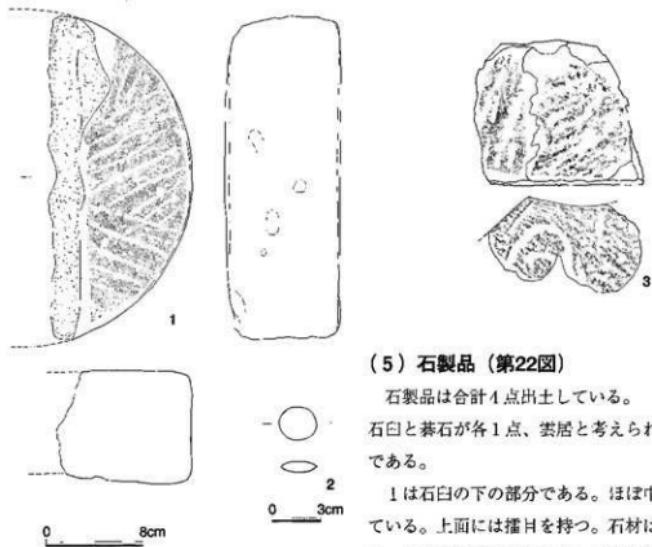


第20図 ガラス製品実測図 (1) ($S=1/3$)



0 10cm

第21図 ガラス製品(2)・ダニエル電池実測図 ($S=1/3$)



第22図 石製品実測図 (S=1/4・1/3)

(5) 石製品 (第22図)

石製品は合計4点出土している。

石臼と磨石が各1点、雲居と考えられるもの2点である。

1は石臼の下の部分である。ほぼ中心で欠損している。上面には擂臼を持つ。石材は花崗岩である。2は白色の磨石である。石材は不明である。

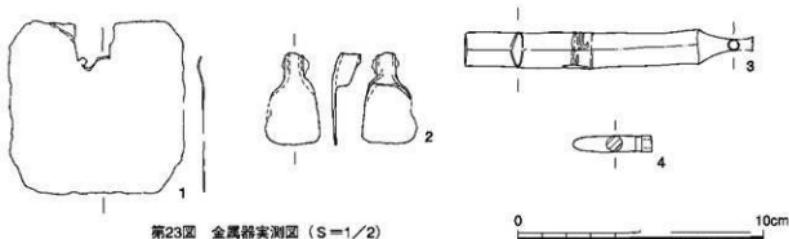
3は破片ではっきりしたことは分からぬが、形

状から雲居と考えられる。雲居は棟止瓦の下方に設置されるものであり、瓦で作られるが石製のももあるようである。

(6) 金属製品 (第23・24図)

金属製品は、板状製品や接続部品、弾状製品、用途不明品が出土している。図化していないが他に雨トイ受けと思われるものも出土している。

第23図1は鉛製と考えられる板状製品である。非常に薄くできている。上部中央のくぼみは何かが接続していたと思われる。鉛製と見られるので、ダニエル電池の素焼きの容器に入れられた亜鉛板と推測される。2は何らかの接続部品と考えられる。上部は空洞になっており、何かを差し込んでいたものと見られる。緑青を噴いており細かい点については不明である。1の板状製品に接着されていた可能性もある。ダニエル電池に関係しているかもしれない。3は用途不明品である。内部は空洞で薄い作りである。中央に薄い紙のようなものが付着している。4は弾状製品で銃弾の可能性がある。基部は空洞になっており白色の物質が詰まっている。第24図1は御崎谷遺跡で出土した古銭である。報告書の掲載から漏れていたので、この報告書で掲載する。1は寛永通宝で2は十銭銅貨である。1は新寛永である。2は明治2年としか読めず、鋳造年は不明である。



第23図 金属器実測図 ($S=1/2$)

第7節 小 結

ここまで述べてきた遺構と遺物について簡単に整理しておきたい。

1. 検出遺構について

遺構は建物 1・2・3 からなる礎石建物群と、平垣面と斜面の間の溝、それに架かる石橋、井戸跡、柱を立てていたと思われる土坑からなる。これらは、防衛庁の残された資料から「官舎」として設置された施設であることがほぼ間違いない。官舎と概にいってもどの建物がどういった利用をされていたのか現在のところ不明である。しかし、建物 1 は御崎谷遺跡の望楼の管理棟とほぼ同じ構造で、さらに石垣で基礎を作っていることから考えると、その他の建物よりは重要度が高かったものと考えられる。

2. 出土遺物について

出土遺物のほとんどは、勤務者が使用し、また施設やそれに関連する機器の部品として使われた後に廃棄された状態で出土している。

陶磁器 基本的には日常生活で使用された食器が多い。焜炉は調理具や暖房器具で、建物 1 に設置してあった大釜はトイレかあるいは水槽であったと思われる。陶磁器の産地は磁器の中に肥前系と見られるものと瀬戸美濃系と見られる 2 種類がある。肥前系の磁器は、型紙刷りによるものであることから、1873(明治 6)年以降であることが分かる。しかし大部分の資料は産地が判明していない。上記の産地以外も想定するべきであろう。陶器は島根県西部で焼かれた「石見焼」がほとんどである。最近まとめられた編年⁶によると、19世紀後半～20世紀前半の時期に収まるとみられる。

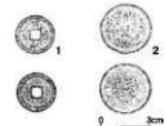
瓦 軸薙瓦がほとんどである。礎石建物群の内の幾つか、あるいは全てが瓦葺きであった可能性がある。出土した軸薙瓦の産地は、軸薙瓦の一大生産地である石見地方(島根県西部)が考えられる。石見地方では赤い軸薙瓦を生産しており、出土した瓦の軸薙の色調を見ても石州瓦(石見地方で焼かれた瓦の総称)と変わらない。産地は石見地方を考えて差し支えないものと思われる。

ガラス製品 ビールなどのアルコールの瓶、照明関係が主で、生活に使用されていたと思われる。

ダニエル電池容器 通信無線用の電池として使用されていたものと考えられるが、出土数は少ない。したがって予備の部品としていたりかの建物に収納されていたものではないかと思われる。

石製品 石臼は生活道具で碁石は娯楽品である。雲居は建築部材である。

金属製品 ダニエル電池の部品の可能性があるものもある。また銃弾らしきものも出土しているが、使用されたものか不明である。



第24図 御崎谷遺跡出土古銭
($S=1/3$)

第5章 まとめ

第1節 御崎谷Ⅱ遺跡出土遺物の時期

御崎谷Ⅱ遺跡で出土した遺物は、日常品である陶磁器や瓶類が多いが、ダニエル電池など普通の集落には存在しない特殊な遺物も存在する。こういった遺物はここが特殊な性格の遺跡であると示している。後述するが御崎谷Ⅱ遺跡と御崎谷遺跡は戦争に関係した施設（官舎と海軍望楼）であることが当時の公文書から分かる。さらに施設が設置されたのは1898（明治31）年で、廃止されたのは1910（明治43）年とも判明している^⑩。

出土遺物の年代を考えると磁器は19世紀後半以降、陶器は19世紀後半～20世紀前半までの時期が考えられ、おおよそ文献と一致する。

以上のことから、施設の使用期間が文献の通りで、なおかつ官舎も望楼と消長を同じくしていれば、御崎谷Ⅱ遺跡の出土遺物は明治後半期の一括性の高い遺物として評価できるのではないかと考えられる。

第2節 御崎谷Ⅱ遺跡の性格と御崎谷遺跡との関係

明治期の公文書からは御崎谷遺跡は「海軍望楼」で御崎谷Ⅱ遺跡は「官舎」と考えられる^⑪。

この文献からは御崎谷Ⅱ遺跡が官舎であることはほぼ間違いないが、検出した遺構から官舎であるといえるのかはっきりしていない。

御崎谷Ⅱ遺跡には御崎谷遺跡にある望楼やアンテナ設置土坑などは確認されていない。唯一、柱を立てていたと思われる土坑はあるが、アンテナというよりは電柱などの規模しかない。御崎谷Ⅱ遺跡の主な遺構は建物であり、遺構からは望楼と考えがたく官舎に近いといえる。

また遺跡の立地であるが、御崎谷遺跡や大床遺跡は施設の性格上、非常に見晴らしのよい位置に造られている。しかし御崎谷Ⅱ遺跡は周囲を斜面に囲まれ見晴らしは悪い。この点は、軍事施設でも官舎という性格が現れていると思われる。

文献上では一体の施設として見られる両遺跡であるが、今回の調査成果から関係を考えてみる。

御崎谷Ⅱ遺跡の出土遺物の中に御崎谷遺跡で出土した遺物と接合したり、同じ工具（工房）によって作られたと考えられる遺物が出土している。前者が第12図12、後者が第10図10・12・22、第11図5、第14図4である^⑫。前者は小片が御崎谷遺跡で出土し、後者は底部外面の墨書きに若干書体の異なる部分があるものの全く同じ文面が書かれており、その他の遺物も同じ模様をもつ陶磁器である。こういった点からも御崎谷Ⅱ遺跡と御崎谷遺跡は同じ時期に使用されていた一体のものと、出土遺物からも言えるのではないかと思う。

遺構からは、御崎谷Ⅱ遺跡の建物1は埋設してあった大甕の位置が半間ずれているが、御崎谷遺跡の建物跡と全く同じ構造であるといえる。これは工人が同じである可能性もあるが、教本が同じであったとも考えられる。その点からの検討は今後行っている。

以上、まとまりのない記述になったが、緊迫した外交関係の中で設置された海軍望楼という直接戦争に関係した遺跡に付属する官舎からは、戦争に関係した遺構や遺物がほとんど出土せず、生活道具や娯楽道具が主に出土している点は興味深い。こういった望楼と官舎という一体の施設の調査は全国的に珍しいようである。また、このような「戦争遺跡」は、戦争という愚かな行為を再認

識する上でも非常に大切なものである。十分な調査とはいえないかもしれないが、この成果が平和を考える資料となれば幸いである。

(註)

- ①島根県教育委員会 「東船遺跡」所収 2002年刊行予定
- ②隱岐島後教育委員会野津研吾氏の教示による。
- ③前掲①
- ④島根県教育委員会 「御崎谷遺跡・大床遺跡」 2001
- ⑤前掲③
- ⑥前掲③
- ⑦前掲③
- ⑧前掲③
- ⑨西尾克己氏の教示による。
- ⑩島根県教育委員会 「石見焼関連遺跡調査報告1（飯田A遺跡・長東坊師窯跡）」 2001
- ⑪前掲③「御崎谷遺跡・大床遺跡」には西郷海軍望楼について詳細に考察している。
- ⑫明治の海軍省の公文書には、望楼設置に係る土地の献納についての文書が存在し、その付図には「望楼四百坪」「官舎六百坪」とある。望楼は字御崎谷で、官舎は字襟ヶ谷とある。両者の位置関係から望楼が御崎谷遺跡で官舎が御崎谷Ⅱ遺跡であると思われる。「現地領取済御届」明治33年12月27日 「明治30年 公文備考 土木上 二四 防衛庁防衛研究所保管
- ⑬前掲③

(参考文献)

- ・島根県教育委員会 「御崎谷遺跡・大床遺跡」 2001
- ・『季刊考古学』第72号 特集 近現代の考古学 2000
- ・佐賀県立九州陶磁文化館 「柿右衛門様式総合調査事業報告書」 1999
- ・江戸遺跡研究会 「図説 江戸考古学研究事典」 2001

陶磁器觀察表

番号	地	種	土	層	厚	口	深	底	高	最大径	胎	土	表面	文様	産地	備考
10-1	北山	表土	碗		6.1		(5.7)		6.2							
10-2	井戸東	表土	碗		5.8	4.4	6.7	6.0				(外) 赤帯緑				
10-3	北山	表土	碗		(5.8)	(4.1)	7.0	(6.0)				青黄褐色	(外) 黑色鉄錆金箔ぬった形跡あり (内) 水袖			
10-4		表土	碗		6.0	4.8	6.7	6.2				密(白)	(外) 花瓶模2、草花、型紙焼		近畿系	
10-5	石垣南	表土	碗		7.2	4.5	8.0	7.5				密(白)	建物、山、松、木、茎1、鳥3、			
10-6	北山		碗		(6.1)	4.0	(6.2)	(6.2)				青白色	(外) 青雲文、唐子ほか			
10-7	建物2南	表土	碗		3.75		(4.2)									
10-8			碗			(5.4)	(4.8)	(7.0)				密白色	(外) 常滑(窓台内)			
10-9	石垣		碗			(5.9)	(4.1)					青白色				
10-10	南東端		碗		7.4		3.0	2.6	7.4				(内) 一部ピンクに着色			
10-11	建物西	表土	碗		5.6	(3.4)	3.7	(5.7)	密						内外面輪有り	
10-12	東	表土	碗		7.2	3.0	4.1	7.3				(外) 青記繋び、松、竹、梅、圓紋11、圓綻11、「高台内」青落印水呂				
10-13		表土	碗		7.4	4.1	4.3	7.5	青			(内) 青苔文(十)、菊、梅、圓紋11、圓綻11、「内」圓綻11				
10-14	石垣	表土	碗		(8.0)	3.8	4.5	(8.1)				密白色	(外) 青褐色、木、蓮葉2、圓綻11、圓綻12、「高台内」褐色「海○」			
10-15	北山	表土	碗		(8.3)	(4.2)	4.7	(8.4)				密白色				
10-16			碗		8.7	3.8	4.4	8.8				青黃白色				
10-17	建物2西	表土	碗		7.8		(4.0)									
10-18	石垣南	表土	碗			9.8		(4.9)	9.9			青白色 黑色櫻絞子		胫物系		
10-19	建物	表土	碗				(4.0)									
10-20	井戸	表土	碗		(9.6)	(3.4)	4.1	(9.7)	密(白)			(外) 線圓綻12、圓綻11 唐草文(青筋、文字、丸)				
10-21	建物		盃		(9.8)		(1.7)	(9.8)				(外) 青不明				
10-21	井戸周辺	表土	碗		(11.8)		(3.3)	(11.8)				(外) 青不明				
10-22	石垣南	表土	碗		11.2	3.1	5.2	(11.2)	密白色			(外) 方凹文、辛				
10-23	北山	表土	碗		10.9	3.7	4.6	11.2				(外) 叶文、建物、器、盆				
11-1	北山	表土	碗		11.9	(3.4)	5.2	12.0	密(白)			(外) 青斑模2、葉模素、葉中央 (高台内側) 染印春海				
11-2	石垣南	表土	碗		(11.4)	4.1	5.1	(11.5)	密(白)			青色で帯、龍印摩訶?四葉?				
11-3	北山	表土	碗		(11.6)	(3.6)	5.1	(11.8)	密(白)			(内) 菊、青龍(外) 十 (高台内側) 染印春海				
11-4	北山	表土	碗		11.4	3.8	5.2	11.5	密(白)			褐(3色) 内外輪筋模				
11-5	北山	表土	皿		10.5	6.7	2.0	10.7	密(白)			青模、級移文繩かご、根海以上赤 花皮質、新説跡				
11-6	石垣南	表土	皿		(12.4)	(7.4)	2.2	(12.5)	密(白)			(内) 線松、竹、梅、紅葉、菊、 青文、圓線、模?文字				
11-7	北山	表土	皿		(10.9)	(7.2)	1.9	(11.0)	密白色			破断面に挽繩紋あり				
11-8	石佛	表土	皿		(9.2)	(5.2)	1.4	(9.8)	密白色					灰色		

件番No.	遺 墓	土 層	器種	口 径	底 径	高さ	最大径	始 上	装飾・文様	產 地	備 考
11-9			皿	(15.2)	(9.2)	2.4	(13.3)	密	人物2・本面鏡4		
11-10	井戸		皿	12.5	7.3	2.5	12.7	密 (P)	鳥、木葉、鶴?、枯木		
11-11	石室	表土	皿	(8.2)	4.0	2.1	(8.3)	密淡黄色	底部斜切り	内面黒あり 外面黒あり	
11-12	9トシ	表土	皿	(20.6)	(9.6)	3.2	(11.0)	密 (白)	青、青海波、七宝唐草、螺旋、含文、乳頭、学、梅、ススキ? (外) 花草	肥前系	
12-1	石塚市	表土	皿	(9.2)	(3.9)	2.4	(9.3)	密白色	(外) 紫、白、綠、褐色花、松葉、茎	内外面黒あり	
12-2	石塚市	表土	皿	9.5		2.8	9.6	密 (白)	(外) 青鳥、鳩印、鳥、唐花、花? 3 (内) 青出墨、松、竹、梅		
12-3	石塚市	表土	皿	9.3		2.6	9.6	密 (白)	(外) 青鳥、鳩印、雀頭 (内) 青唐草		
12-4	建物2 東	表土	皿	(9.2)		現在直 (1.2)	(10.9)	密白色	(外) 青		
12-5	石塚市	表土	皿	6.4		1.1	(7.6)	密黃白色		外面黒あり	
12-6	北東?	表土?	茶つまみ			(2.0)	1.9		(外) 青不明		
12-7	建2南	表土	上版		(12.6)	(7.6)	(19.2)	密白色	(外) 青面鏡1、文字?		
12-8	石塚市	表土	急須	6.36.6	6.0	4.6					
12-9			急須	(6.2)		(3.0)	(8.5)	密白色 黑色微粒子?	(外) 青文字、小柄紋		
12-10	建物2 西	表土	鉢	(17.2)		(4.4)	(17.6)	密白色	(内) 竹彌? 黑色微粒子?	肥前系	
12-11	北山	表土	鉢	17.6	9.0	6.35	17.8				
12-12	建物2	表土	鉢	22.7	10.7	7.1	23.1	密白色			
12-13	建物2 東	表土	合子	(12.4)	11.2	(3.4)	(12.6)	密白色	(外) 青水仙、雲		
13-1	井戸周辺	表土	椎鉢	17.2		(5.05)	18.6	密褐色	内面に縦目跡あり		
13-2	北山	表土	鉢	(21.4)		現在直 (4.2)	(22.6)	密黃褐色		石見焼	
13-3	石塚市	表土	鉢	(17.0)		(3.7)	(18.0)	密褐色		石見焼	緑釉
13-4			行平	(20.5)		(4.4)	現在直 (21.5)			石見焼	
13-5	北山	表土	椎鉢					長石、と 多く合む	内面に縦目	石見焼	外面に褐色釉
13-6	北山	表土	土鍋	22.0		22.4	黄白	外面上部内面のみ施釉		石見焼	茶色釉
13-7	北山	表土	櫛利		9.4	(18.7)	17.9	密褐色	鐵、西町		灰褐色釉
13-8	北山	表土	混焼	30.2	22.8	24.9	32.0	6.0以下 の部分			
14-1	石塚	表土	皿	26.0	16.0	26.2	29.8	密白色	込部内面ねじ巻き7側	石見焼	系紋
14-2	北山	表土	不明		3.0	13.6	3.7				
14-3	井戸東	表土	不明		11.7	(11.7)	12.2			石見焼?	横各面2、三等 級焼(内) 6体
14-4	建物1		大甕	44.8	25.6	58.0	53.2	密灰色		石見焼	茶・濃色釉
14-5	石塚北	表土	土管	(29.2)	(25.0)	(17.9)	(30.4)	1mm程度の 砂粒含む	板状・丸角によるナラ舟アヘラケズ		

瓦觀察表

辨別	造構	土層	種別	a	b	c	d	d		f	g	h	備考
								幅	高				
17-1	石屋	表土	輪瓦	(15.1)	幅 (11.8)	高	厚	(1.8)	厚				
17-2	石頭	表土	輪瓦	(17.5)	幅 (25.3)	高	厚	1.6	厚				
17-3	建物2	表土	大變斗	無邊幅 18.9	長 22.4	厚 1.8	高	4.1	孔徑 1.0				
17-4	建物2西	表土	大變斗	無邊幅 18.5	長 21.4	厚 1.7	高	3.1	孔徑 0.9				
17-5	建物2西	表土	變斗瓦	無邊幅 (10.5)	長 23.2	厚 1.7	高	2.05	孔徑 1.1				i
17-6		表土	輪瓦	幅 (13.1)	幅 (20.0)	厚 4.8	高	1.7	輪厚 5.3	輪長 19.1			
17-7			輪瓦	幅 (20.6)	長 23.6	厚 1.7	抽厚	4.4	孔徑 1.5	輪長 18.7	孔徑 1.2		
18-1	石屋	表土	軒棟瓦	瓦當幅 4.4			2.7	2.6		(6.6)	(8.9)	11.8cm	
18-2	石頭	表土	軒棟瓦	3.5			2.1			(16.0)	(9.2)	11.9cm	
18-3		表土	軒棟瓦	3.2	瓦當玉緣 幅0.4	瓦當上緣 深0.2	瓦當厚 1.2	支撐高 2.5	文様幅 (12.5)	幅 (16.4)	長 13.7	厚1.6cm	唐草文
18-4	石組	表土	軒棟瓦	4.5			2.7	2.6	(13.6)	(19.8)	(14.4)	厚1.7cm	唐草文
18-5	石垣南	表土	軒棟瓦	4.6	0.9	0.2	1.8	3.0	14.1	(18.5)	(18.9)	厚1.9cm	唐草文
18-6	建物2北	表土	軒棟瓦	4.7	1.1	0.2	2.0	2.9	14.5	(9.9)	(22.7)	厚1.7cm	唐草文
18-7	石組	表土	軒棟瓦	4.0	0.7	0.2	2.4	2.4	15.6	25.6	(28.0)	11.8cm + 1.0cm	唐草文1
19-1	建物2西	表土	軒棟瓦	4.6	0.7	0.2	1.7	1.8	14.4	(25.6)	(1.5)		
19-2	建物	表土	棟瓦	(19.1)	(16.3)	1.7							
19-3	石頭北	表土	棟瓦	幅 30.3	長 28.1	厚 1.7							
19-4	建物2北	表土	棟瓦	30.7	28.6	1.7							
19-5	建物2西	表土	棟瓦	31.1	28.8	1.9							
19-6	北山	表土	棟瓦	(16.4)	27.8	1.8							いぶし

ガラス製品觀察表

辨別	造構	土層	器種	口徑	底径	器高	最大径	備考
20-1			瓶口部		2.0	(3.5)	(2.7)	
20-2			瓶底部			(3.1)		
20-3			瓶底部	5.8	(1.4)	(6.1)		
20-4			瓶底部	5.6		(3.9)	5.9	
20-5	井戸周辺	表土	瓶底部	5.8	(8.2)	6.5		
20-6	井戸周辺	表土	ビール瓶上部	2.4		(10.8)	(5.8)	
20-7	井戸周辺	表土	ビール瓶上部	(2.9)		(15.7)	(7.3)	
20-8	井戸周辺	表土	ビール瓶底部			(16.1)	8.0	
20-9	井戸周辺	表土	ビール瓶上部	2.6		(23.5)	(8.6)	
20-9	井戸周辺	表土	ビール瓶底部	6.4	(14.0)	8.0		

序号	造形	土 磁	種 别	口 径	底 径	底 高	最大径	備 考
20-10	動物 2	表土	ビール瓶	2.1	7.0	29.2	8.0	完形品
-	-	-	-	-	-	-	-	-
20-11	井戸周辺	表土	瓶	-	-	-	-	-
20-12	井戸周辺	表土	ビール瓶底部	-	7.6	(6.5)	7.9	-
20-13	井戸周辺 1	表土	ビール瓶底部	-	6.6	(5.9)	(8.4)	-
20-14	井戸周辺	表土	ビール瓶底部	-	6.7	(11.0)	(7.8)	-
20-15	井戸周辺	表土	ビール瓶底部	-	6.8	(4.3)	(7.4)	底部外面
20-16	-	-	ビール瓶底部	-	6.7	(6.7)	7.8	-
21-1	北山	表土	-	1.5	-	(5.7)	(6.1)	-
21-2	北山	表土	-	-	5.6	(4.7)	(7.1)	-
21-3	北山	-	-	-	3.6	-	(6.2)	(7.1)
21-4	北山	表土	-	-	3.3	-	7.0	(3.5)
21-5	北山	表土	ランプ?	-	-	(2.0)	(11.1)	-
21-6	北山	表土	ランプ?	-	-	(0.5)	(11.2)	-
21-7	北山	表土	電灯取	-	-	(4.85)	(30.8)	-
21-8	北山	表土	板ガラス	-	-	厚み0.1	(18.2)	-

ダニエル電池（白・赤）観察表

序号	造形	土 磁	種 别	口 径	口縁幅	底 径	底 高	マーク	付 着 物	備 考
21-9	東	表土	ダニエル電池（白）	cm	cm	12.2	6.5	(12.2)	無	無 全面に施場
21-10	石垣西	表土	ダニエル電池（赤）	cm	cm	cm	3.0	10.9	-	無
21-11	石垣	表土	ダニエル電池（赤）	9.3	2.9	8.3	2.7	10.8	「み」	内外とも底面部に網

石製品観察表

序号	造 形	上 层	種 別	長さ	幅	厚さ	重 量	備 考
22-1	動物 3 北	表土	石臼（ド）	(26.8)	(11.9)	9.4	g	-
22-2	動物 3 西	表土	石臼	cm	2.3	0.6	x	白色
22-3	-	-	石臼	cm	cm	x	-	-

金属製品観察表

序号	造 形	土 磁	種 别	長さ	幅	厚さ	器 型	材 质	色 滴	備 考
23-1	北山	表土	板状製品	(7.2)	7.1	-	0.01~0.03	銅?	褐色	ダニエル関係か
23-2	北山	表土	板状製品	(3.8)	2.2	0.9	0.1	銅?と鉄	青緑色	ダニエル関係か
23-3	南東側	表土	不明	11.8	1.4	0.5	0.01~0.5	銅?	褐色	-
23-4	石垣西	表土	板状製品	3.2	0.6	0.6	-	銅?	青緑色	自然小波の鋸か?
24-1	-	-	寛永通寶	2.4	-	-	-	銅	青緑色	御崎谷通路出土
24-2	-	-	十錢銅貨	3.0	-	-	-	銅	青緑色	御崎谷通路出土

写真図版



御崎谷Ⅱ遺跡と日本海

カラー図版2



街崎谷II遺跡全景



日本海から御崎谷Ⅱ遺跡を望む（南から）



日本海から御崎谷Ⅱ遺跡を望む（東から）

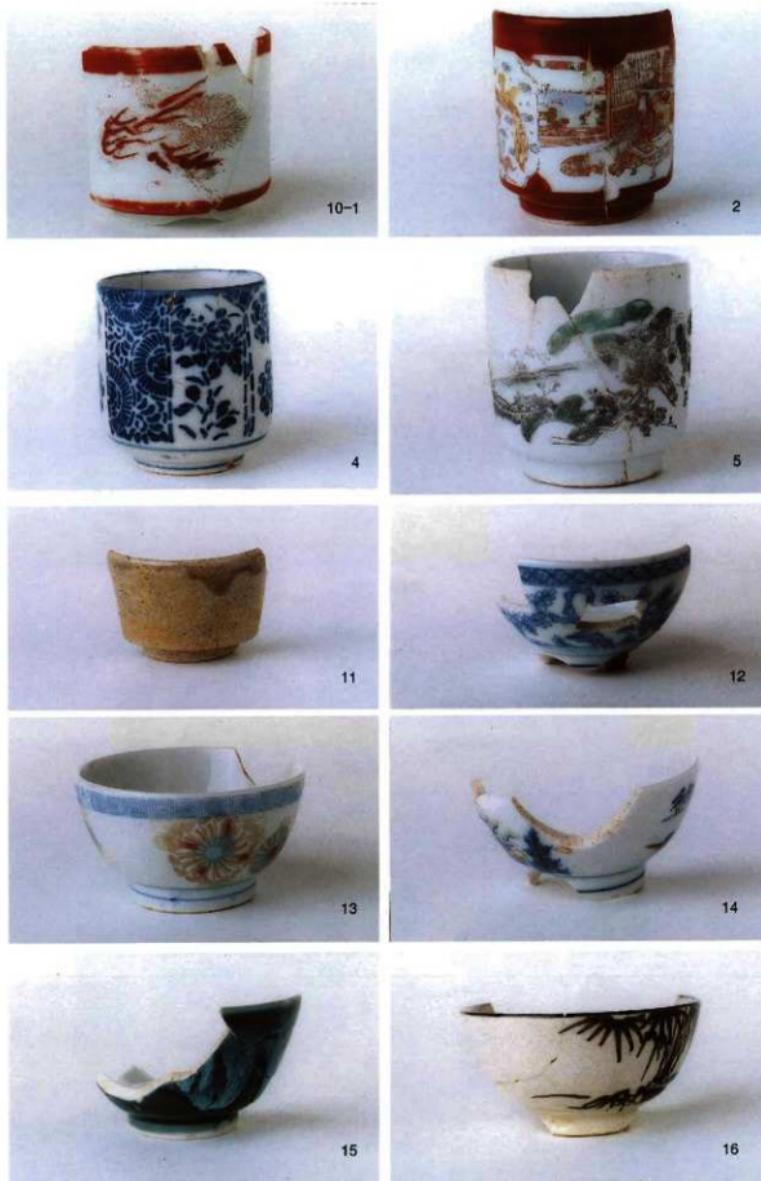
カラー図版4



陶磁器セット



陶磁器 (1)



陶磁器 (2)

カラー図版6



陶磁器 (3)

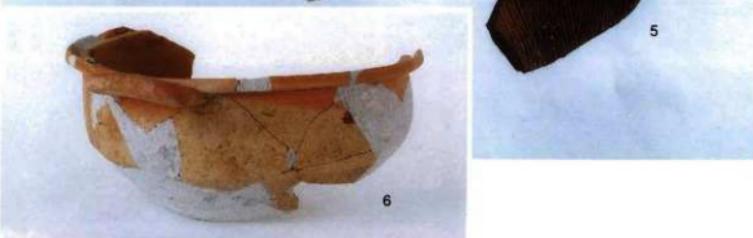


陶磁器 (4)



陶磁器（5）

カラー図版8



陶磁器 (6)



20-10

9

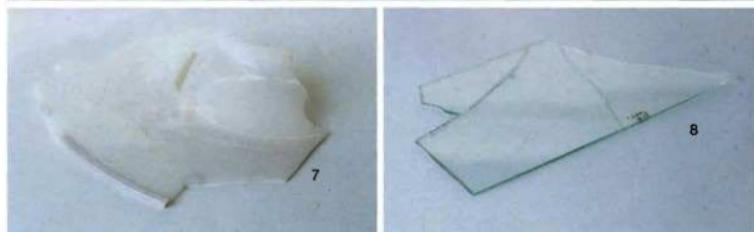
カラー図版9



ガラス製品 (1)



ガラス製品 (2)

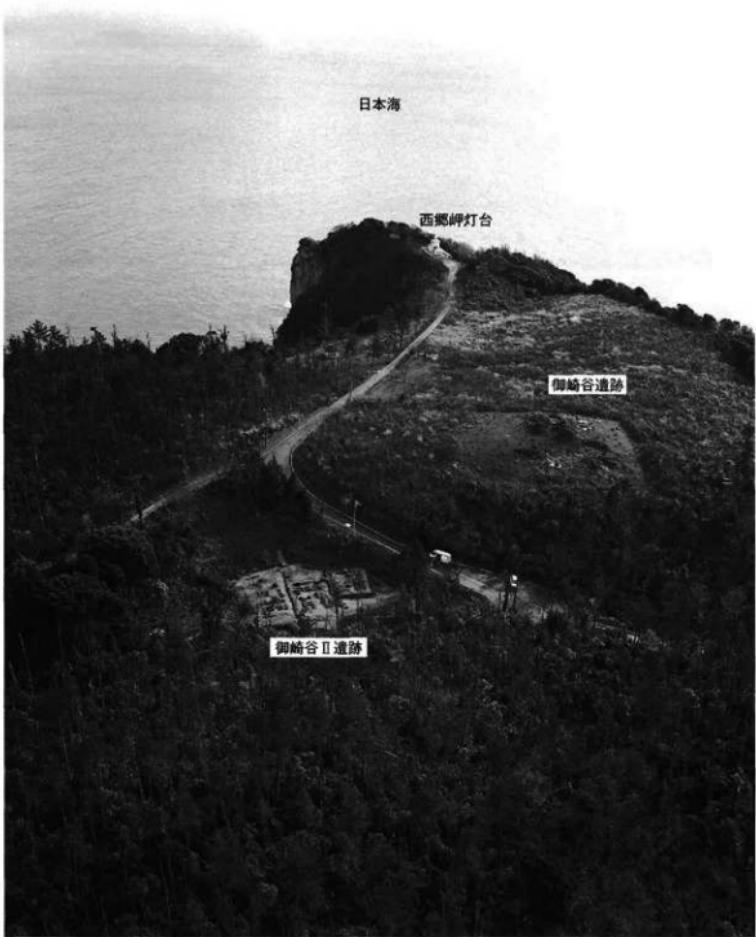


ガラス製品(4)



ダニエル電池

図版1



御崎谷Ⅱ遺跡と御崎谷遺跡（1）



御崎谷Ⅰ遺跡と御崎谷道路

図版3



岬地区航空写真（1947年末撮影）



岬地区航空写真（1965年国土地理院撮影）

図版5



調査前状況（南より）



同上



跡物1完掘状況（南より）



跡物1調査状況（南より）

図版7



跡物1石垣（南西より）



跡物1完掘状況（東より）



建物2完掘状況（東より）



建物2完掘状況（北東より）

図版9



建物2石敷（西より）



建物2石敷（北東より）



建物2白色物質敷き塗構（東より）



建物2礎石及び盛土状況（南東より）

図版11



建物3完振状況（東より）



建物3完振状況（北西より）



石橋完掘状況（南西より）



井戸跡（北西より）

図版13



建物1大甕検出状況（南東より）



陶磁器出土状況（西より）



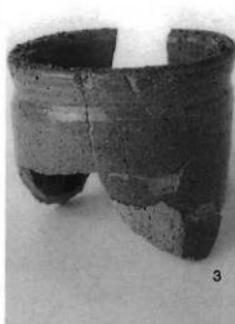
13-8 使用例（焰烙は西側町今津所在 東船遺跡出土品）



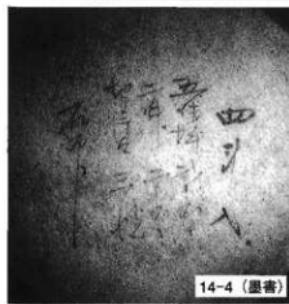
14-4



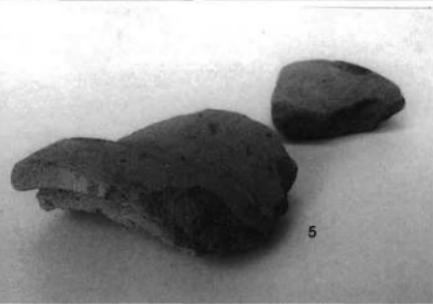
2



3

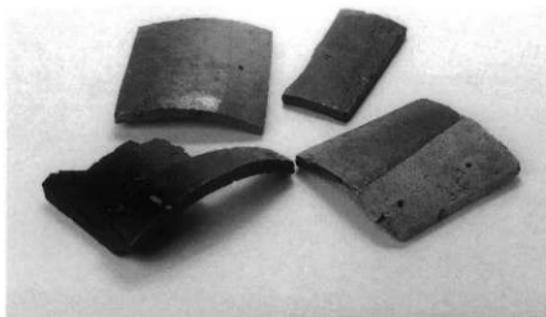


14-4 (墨書き)



5

図版15



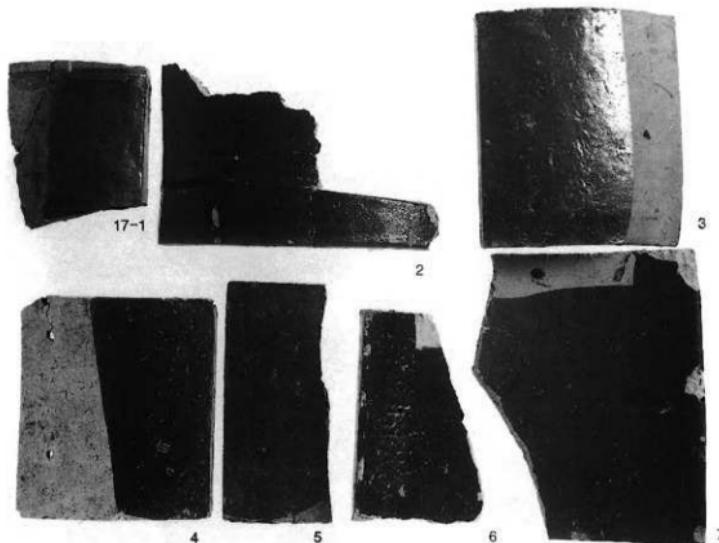
瓦（雁振・大熨斗・小熨斗）



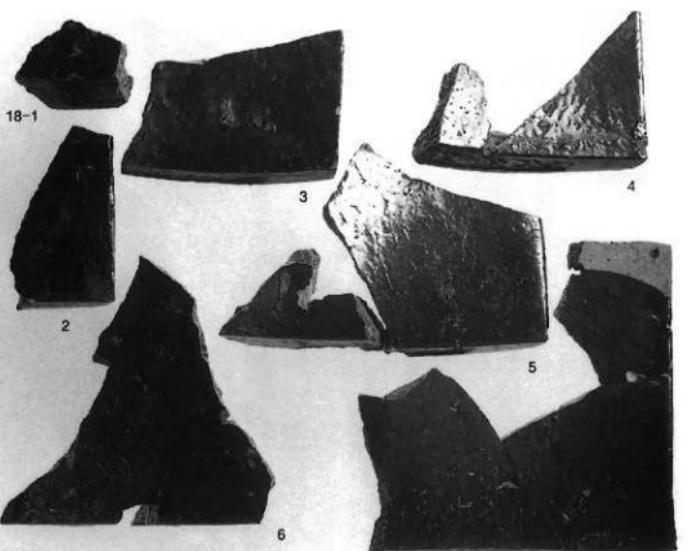
軒瓦



棟瓦

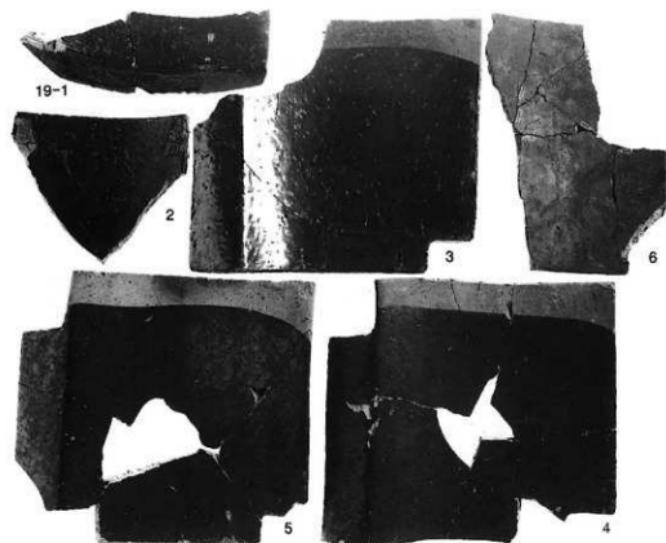


瓦 (1)

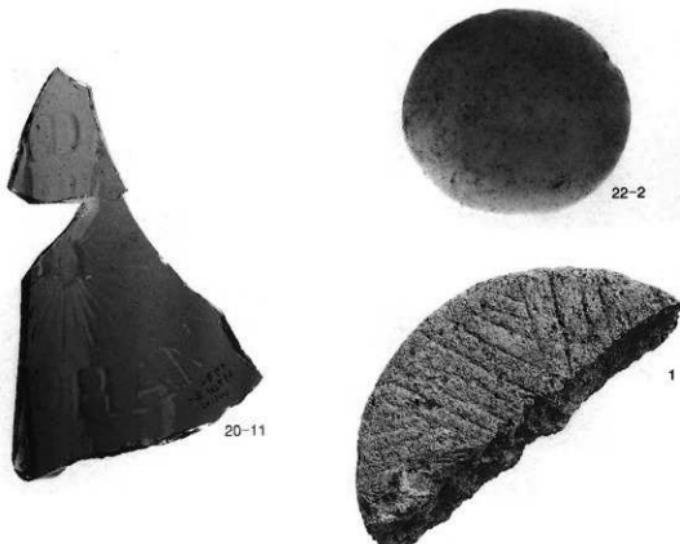


瓦 (2)

図版17



瓦 (3)



ビール瓶銘

石製品 (1)



石製品（2）



金属製品



御崎谷遺跡出土古錢

報告書抄録

フリガナ	ミサキダニニイセキ					
書名	御崎谷II遺跡					
副書名	海軍望楼の官舍跡の調査					
シリーズ名	隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	3					
編著者名	伊藤徳広					
編集機関	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター ホームページ http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/					
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL 0852-36-8608 E-mail maibun@pref.shimane.jp					
発行年月日	西暦2002(平成14)年3月29日					
所取遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
島根県 隠岐郡 西郷町 岬町		36°10'15"	133°20'21"	2001.11.1 2001.12.14	1,230m ²	空港建設
御崎谷II	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
	戦争遺跡	明治	石垣を伴う礎石建物跡 礎石建物跡 非戸跡 石橋跡 溝跡	陶磁器 鉄器 ダニエル電池容器 ガラス製品 瓦	海軍望楼に 伴う官舎	

關崎空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 第3冊

御崎谷II遺跡

—海軍望樓の官舍跡の調査—

2002年3月 印刷

2002年3月 発行

発行 烏根県教育委員会

印刷 総合印刷株式会社